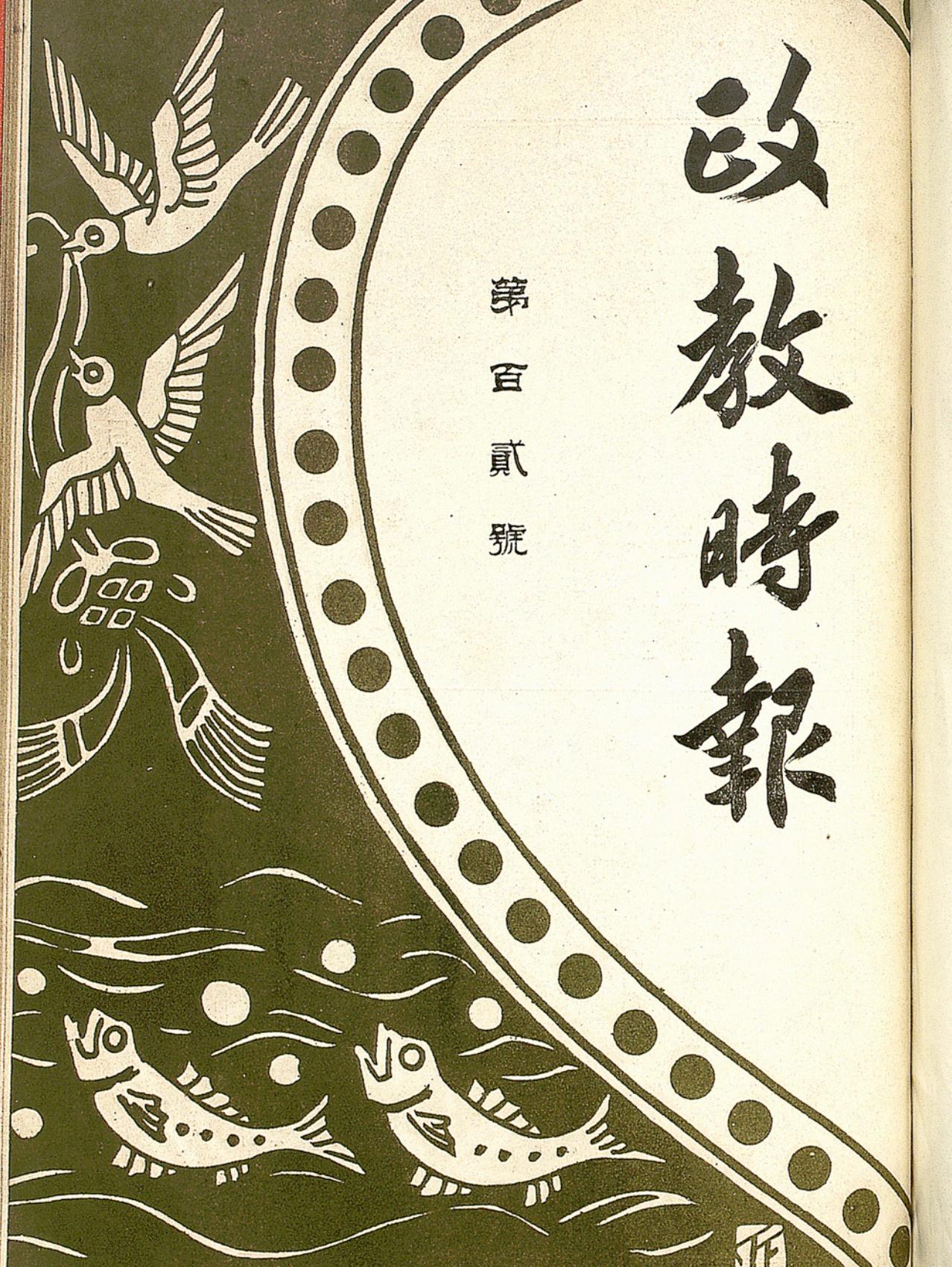


政教時報

第二百貳號



政教時報第百貳號目次

卷之三

大日本佛教徒同盟會綱領

佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確
國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
 - 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
 - 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
 - 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
 - 五、公認教制度を調査する事。
 - 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。
 - 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奨励して、善良なる家庭を形成らしめ又社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
 - 八、積極の方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
 - 九、教會の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
 - 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
 - 十一、殖民傳道を奨勵する事。
 - 十二、佛教の光輝を發揚し、其惡化を暫く世界に光發せしむる策を講ずる事。



Owen Powell

オリヴァー、クロ
ムーアルは泰西政
界の巨人也。英國
武骨漢の標本也。
當年親炙せる、サ
1、アーリップ、ウ
ル・ウサクは自ら其
備忘錄に彼が壯年
の風貌を描きて曰
く、彼が衣服は頗
る質素にして一見
不器用なる田舎仕
立屋の手に成れる
を知るべく、白シ
ヤツは殆どと垢付
がざることなし、
彼か襟は舊式にし

の如く、態度頗る真摯にして、沈痛森嚴の風見眉宇の間に畢畢たりと、實に躍如として彼が面目を見つべきにあらずや。

彼は久しく田舎に在りて農事に専注せしが或る時期に於て憂鬱惨憺たる内心の苦悶を實驗せり、一傳記に其實況を叙して曰

力彈きて屢々倒れむとせり、且つ居常天を仰きて絶叫し、頭を垂れて痛嘆せり、彼は遂に慰籍を宗教に求め、平靜を信仰に仰き、肝膽相照すの友によりて心中の寂寥を治療せむことを試みたり、當時彼が身軀の健康は著しく損せられたり、彼が精神の急迫は一點の余地を存せざるに至れり、彼は中夜昏々として展轉反側安眠を得ず、苦悶の極遂に彼か住居せるハントンの市醫、ドルトル、シムコットを呼びて其治療を求めたり、不幸にして其年月を明記せず且詳細の事徵す可からずと雖、醫師の親しく、サム、フリップ、ヴァルタクに語れる事實によるに當時彼は自ら死に近きつゝあるを感じたりといふ、實に是れ彼が一生に於ける神秘なる危機たりし也。カーライル論じて曰く、古今偉大なる人物は常に苦悶症に陥る事あり、サミュエル、ジョンソンの如き其一人也、深黒冥暗にして永久の生命は其路を塞ぎ、天上の明星は其影を隠し、茫茫々たる地獄の深坑は蒼々たる毘天の篤窓に接せり、見よ沙漠中に於ける誘惑、ヘルクレスの選擇等何れも心靈上の一大變化を意味せざるなし、オリヴァーをして彼が暗淡なる悲哀と憂鬱に於て慰藉を取らしめよ、彼が感ぜる悲哀の分量は直ちに是れ彼が有する同情の分量及び彼が有すべき靈能勝利の分量を意味するものにあらずや、吾人が悲哀は吾人が高貴の倒影なり、吾人が失望の深きは吾人が希望の高遠なるを徵するに足れり、黒烟地獄の如く宇宙に漲れり、而して眞實なる

内心の偉力一たび加はれば忽爾火炎となりて天上の光榮は此に開闢せられむとす、彼が確實なる信仰を得たるは實に此時なりとす、彼は言ふべからざる歡喜を以て内心に激變を受けたり永久の死の虎口を脱するを得たり、是實に人生に於ける偉大なる一時期、爾果して向上的道を辿らむか、將た神明と交らむか、爾は一大疑問に遭遇せり、是人によりて提出せられたるものにあらず、言語によりて言ひ顯はされたるものにあらず、唯、淵默によりて問はれたり、悠久によりて質されたり、是古今東西の哲人が研究し、天上地獄に於て顯はされ、無窮の生命と永劫の幽冥とを以て其運命を分つべき危機に迫る善惡正邪の意味の分るゝ所、是れ清淨教徒の氣魄にして、凡ての時代に於て偉大、高壯、回天の事功を醸し来る者、皆此精神的經驗に胚胎せざる事なしと。

彼は自ら其從妹セントシヨン夫人に寄するの書に其實驗を披露して曰く予が胸裏に於ける乾燥渴一滴の水なかりし茫茫々たる沙漠中に瞬發速り出る清泉を得たりと實に彼は此の實驗を經て内心に於ける一大激變を起せり、彼は嘗て放縱なる行爲なかりしにあらず、然れども一たび此內的激變に遭遇したる後は殆んど其人格を一變せり、彼は嘗て他と賭して八才ボン又百五十ボンドの利益を得たることありしが、一朝忽ち懺悔の心を起して、盡く其所得を返却したりといふ、以此精神的經驗に胚胎せざる事なしと。

像は千古英國人の氣風を代表しつゝあるや、聊か彼が内的の實驗を描くこと此の如し。

教道難往

紀 平 正 美

上。

是れは善い事であるから爲せよ、彼は惡き事であるから爲す忽れと、眞情を吐露して人に教へた所が、他人は中々強情なもので、教へた通りには實行せないものである、よし目前では如何にも會得したらしくするも、直ぐ其後には全く反対な事を行ふ場合もある、教導者をして常に嗟嘆の聲を發せしめるのである、釋尊在世の時ですら、弟子等は既に分裂の傾向を顯し、彼は釋尊の心を勞せしめた事である。孔夫子をして陳蔡の野に饑ぬしめ、我道行はれずとの嘆聲を發せしめたのも皆是等大聖の教を了解し能はざりし人々の所爲である、昔の如く万事單純なる時代でさえ既に斯の如くであるから、現今の複雜なる世では、教導難の聲の益々大なる事は、實際無理ならぬ次第である。然らば其理由は抑も如何なる所に存するか、余輩は今少しく其分析を試みやうと思ふのである。勿論思ひ附の儘を書き下すのであるから、是れが若し同感の諸兄に多少の参考になれば幸である。

第

百

號 式

(三)

先づ余輩は心理的分析から始めやうと思ふ。物事を聞いて其を實行すると云へば甚だ簡単の様なれど、其間の心理的經過は中々簡単なものでないものである。是れは丁度有機体が食物を消化し、又斯く同化されたる食物が其もの活動となつて出る、此の間の經過を比較に取るとが、尤も説明に便利であるうと思ふ。食物が消化されない間は譬ひ胃中へ入れども矢張依然たる食物であつて、消化されたとはいへない。即ち斯く區別されて居る間は決して其の体の働きとはならない、消化されて始めて其の体の働きと同一なるのである。然るに我等が食物を取るの必要な道具、口或は歯。若くは消化に必要な胃腸其他諸種の消化液は何に依つて支持せらるゝかと云へば、其の身體が取つて消化した食物である。其處で自分がなくば細な依存の關係が其間にあるのである。心の上に就て言ふも亦同く此の關係がある。心に既に成り立つて居る組織がなくば、外物の認知は出來ない、外物の認知と云ふことがなくば又始めより心の組織は出來ないのである。

それから又口が小さくては大な食物は取られぬ、歯がなくば硬き食物は喉を通すことも出來ないと同様に、感覺器管が未だ十分其用をなす程に發達して居らなくては、外物認知は勿論出來ないのである、故に既に感覺となれば、丁度食物が喉を通つた様なもので、一步自分のものたるに近づいたのである。

斯く心にしても食物にしても、自分に既にあるもので消化し得るのであるから、自分の体質によりて或るものは或る食物をよく消化し、或るものは又或る食物をよく消化すると云ふ差異が出来る。例へば動物の中には肉食のみのものあり、菜食のみのものあり、又菜肉共に食するものあり、人によりても肉をよく消化するものと、穀物をよく消化するものあるか如く、心に於ても以前からの経験上、彼の事はよく了解出来るが、此の事理は了解出来ないと云ふ如き差も自然に生じるのである。故に凡ての物凡ての人は皆自分の力に應じた自分の世界を自ら構成して、自分は其中心となつて居るのである。植物には植物の世界あり、動物には動物の世界あり、甲の人には甲の世界あり、乙の人には乙の世界あり、政治家、實業家、學者、醫者、乞食、各皆それ各自特有の世界を持つて居る。此の世界は經驗を積むに従つて漸次深くなり、又廣くもあるが、事物の判断即ち消化はどこ迄も自分の世界が基礎であることは、我等が個人として存在する限りは到底免ざる所である。

以上は我等が物事を見聞して、我がものとなり、更に行爲を動かすに至る迄の大體の順序である。斯く人は皆自分の世界で物を判断し行くと云ふことが即ち教導難の起る根本の理由である。例へば其人に取りて余り六ヶ敷い事を教へた所で、消化が出来なくば致方がない、若し消化されるにしても、不當な組織で消化される様な事であつては、毒を消化したと同様に自分の身を亡ぼすのである。又人が我が面前では如何にも了解したらしく、自分にもよく解した積りでも、そは自分の世界で消化したのであるから、行爲となつて出る時は矢張其人の行爲で、教導者の豫期した行爲と云ふ事にはならないのである。

然し茲に又注意すべき事は、斯く世界が人々個々に分れて居ると云ふも、決して其間に一致其通な部分が無いと云ふのではない、若し相互の間に全然相違の點があるならば、甲の人と乙の人と、人間と動物或は植物等と、其の他相互間に干渉のない事にならなくなつてはならない。然るに事實一方には平和あり他方には争ひありと云ふ様に、互に相干渉しつゝあるは、是れ相互間に共通の部分があるからである。故に理論から云へば其處に差異のある丈他方面には共通の點がある。例へば同じ陸上に生存するとか、同様な生活をするとか、或は又同じ社會に教養さるゝとか、其他細かに數へ來らば澤山あるてあらうが、其の爲各個の經驗が多くの點に於て似て居る

即ち各個の世界に共通點がある事になる。然し此の共通の範圍は過去の経験の一一致である、即ち所謂「斯くある」所のものであるから、其に關する事に就ては別に指導難は起らない。例へば人間も自然の一物としては、自然法に從屬して居る。其れ故に我等が自然法に從屬して居ると云ふことは「斯くある」所のものである。猶ほ言を換えて曰へば、「斯くある」事は即ち人々經驗を等しくして居る、既に實行しつゝある事で、實行すべしと言ふ事ではないのである。其故一般に「斯くある」事に關する事は教易いのである。ニュートンやダル文の如き大學者が一生涯非常に苦心して得た結果も、其の根本の處丈けは、一時間乃至數時間の教場講義にて、學生に了解せしむる事が出来る。之に反して、「斯くあるべし」と云ふ事に關する方面は、「斯くある」事の不完全なる爲め、更により完全なる事を要求する處より生ずるのであるから、所謂理想の方面は、「斯くある」所の全世界から出て來るもので、單に共通の範圍のみより出て來るものでない。其れ故に「斯くあるべし」と云ふ方面は共通の點より差異ある點に尤も注意を拂はなければならない。

以上の理に依つて又、「斯くある」事の法則は了解するに便利ではあるが、其法則を應用して人世に利用ある機械を發明すると云ふ如き事は、至難である。法則を了解するとは別の事である。即ち發明者の全世界から出なければならぬ、換りも達することがある。孔子をして陳蔡の野に餓えしめ、耶蘇を十字架に磔殺したのも、又古來英雄の末路が多く悲惨であるのも、全く兩者の世界の衝突である。其れで此衝突を避けには、一は被教導者の世界を導者の世界に屈伏させるか、或は教導者が我の世界を破壊して被導者の世界に入り込むかの二方法あるのみである。次號に於て此等の各困難を述べて見ようと思ふ。

言すれば自分自身の世界の不完全を認め、其を完全にせようと思ふ、即ち所謂興味を有する所に於て、始めて創作と言ふことは出來るのである。例へて言へば紡績機械の改良は、其に從事して居る人によつて爲さるゝが如く、是を證明する事實は古來澤山ある。又反對に、よし其の事が「斯くあるべし」と云ふ方面の事であるとも、其の事が相互の共通世界に關するものならば、教へて了解も早く、教へらるゝものゝ主觀を通じても、割合に變化なくして、容易に實行されるものである。即ち習慣風俗等が、時には自然法と同じ程の眞面目を以て繼續さるゝ如き、此のよい例である。其れ故に人の教へる場合には、是非相手の世界に應しなければならない、即ち相手方に取ては理論的抽象的でなくして、具体的即ち實際的でなくてはならないと云ふ根本の法則が出て來るのである。釋尊が唯一涅槃の道を説くに八万四千の法門を開かれたと言ふのも實に茲にあるのである。

相手方の世界によく應する即ち實際的たれと云ふ事が、又簡単な如くにして、其實非常に困難である。而て又此困難は社會の進歩と共に愈々益すかの如き傾きがある。何故に困難であるが。是れ迄は單に教導さるゝ方面のみを論じたのであるが、翻て教育するものを考へて見るに、其の人が無限絶大の神か佛でなくして一個の人間である以上は、又自分自身の世界を持つて居ると云ふ事である。既に自分自身の世界を持



龍樹菩薩烏陀衍那王 に與ふる書

松本文三郎

(叙論の續)

三

學者或は曰はん、龍樹菩薩は固とはれ大乘の學者、大乘深遠の理は實に尊者によりて成り、尊者か名聲の不朽に傳はり後世北方學者の尊崇措かざる所以のもの、亦洵に其の中論（マドヒヤミカ）の一派を開きたりしにあり、然るに此書秋毫尊者幽遠の理を發揮するところなきのみならず、徒らに力を五趣、輪廻、地獄の苦難等の説に盡くす、是れ豈に尊者が特色なりとせんや。焉くんぞ是れ小乘の學者、名を尊者に假りたるか、若しくは其の著者の名を逸し、誤りて之を尊者に歸したるなきを知らんやと。此説一見理あるが如しといへども、未だ盡くさるるものあり。夫れ尊者か大乘の學者たるは固より論なし、然りといへども龍樹の學、其の由來するところを

一上一上又一上。一上直上高山上

頭白日青天近四海五湖皆一望

(六如居士)

求めば、亦實に釋子相承の説に出づ。龍樹は王をして佛道に歸依し、有徳の人たらしめんことを期せしのみ、秋毫其の自ら發揮するところを示して、以て其の妙理に感ぜしめんと欲せしにはあらざりしなり。且つや王者が政を執り、國を治むるに當りて、中論幽玄の理、如何に其の妙を盡くすありとするも、將た何の事するところぞ、龍樹は一代の雄、何ぞ又斯の如き見易きの理に通ぜざるあらんや。見るべし、其の説くところ、一々實行を期し、卑近にして成し易きを望めりしことを、是故に第一頌に於て、既に吾が言鄙なりといへども云々の語あり、乃ち知る、龍樹は俗耳に入り易からしめんが爲めに、殊に其の言を卑しくして、之を説けりしものたることを加之、王是時尙ほ未だ多く學ぶところあらず。特に其の卑近を要するものありしなり。况んや又ターラナートハの傳ふるところによれば、龍樹は唯誠意に佛道を扶殖せんと勉めたりしが故に、其の宗派の如何を問はず、尊者を徳とし、尊者を以て其の主と仰げりと曰へるに於てをや。(佛教史六九頁)

嘗て西藏支那の北方佛教徒のみならず、南海諸州の佛徒、

亦此書を以て龍樹の作となす、是れ實に大有力の反證あるにあらざれば、遂に之を破すべからざるなり。何ぞ徒らに一己の想像を以て古傳を變更すべけんや。

此書元とはれ片々たる小詩に過ぎずと雖ども、而も仔細に之を観味し來らば、又佛教史研究者の大に考察を要するもの

なきにあらず、今左に其の二三を列舉して以て讀者の参考に資す。

(一) 龍樹の時代、地獄の説が如何なる程度迄佛教者によりて唱道せられたるかを概見し得ること、

(二) 龍樹の時、既に觀自在の信念を存在せしたこと、

(三) 龍樹は馬鳴に先ちて、既に阿彌陀佛を説けりしこと等是れなり。

五

此書の泰西學界に紹介せられたるは、實に千八百八十三年マキスミニラーゲ故の竺原研壽氏を追悼し、一文を草し、之を巴利聖典協會雜誌に掲載したるの時にあり。氏は此呂文の後に附するに此書簡に於ける初八頌の英譯を以てせり、是れ義淨の漢譯に基づけるものといふ、而して氏は未だ支那藏經中其の完譯あるを知らざりしなり。而してサドヴァーハナ王の名、亦之をシャーナチヴァーハナと還梵し、印度史上其の王名の發見し得ざるを以て、竊かに支那音譯の當を得ざるなきかを疑へり。然れども氏は此文を草し終りたる後、ウェンツエル氏の譯を得たることをも附記せり。是れにより之を世に公にせられたりしは、實に千八百八十六年の事に屬す、觀れば、ウェンツエル氏の譯、亦當時既に成りしものたる知るべきなり。而も未だ世に公にせられざりき。氏が翻譯の氏は西藏藏經の中より之を英譯し、同年出版の巴利協會雜誌

に掲載し、續て又之を獨譯し、ライアーチツヒに於て出版せり是に於て泰西學者始めて其の全文を覗ふを得たりしなり。

マキスミニラーゲ固と漢文に通せず、其の翻譯必らず何人かの助言によりて成れるものたる明かなり。乃ち今氏が譯文の是非を云々する、寧ろ酷に過ぐへしといへとも、而も謬誤極めて多く、殆んど意義不通の處なきにあらず。今其の最も主なるもの二三を擧げて以て之を證せん。

其の第四頌に曰く

佛法僧(に歸敬せよ)施天の教を持し、各其の德業を積むものは、常に佛說を懸念すへし(括弧内の文字はマキスミニラーゲの補ふところ、以下同)

と。第五頌には曰く

十種の德業を行するには、身口意を最要(行者)となす。人淨生を送らんと欲せは、一切酒類を飲むを禁すへし

と。第六頌又最も奇なり。今其の原文を掲ぐ

"Know that treasures are not constant-each in their state, and give them, as of right, to holy men. All, both poor and twiceborn, will (thereby) be intimate friends in the coming births."

と試みに之を義淨の譯、若しくは我か譯に比較し見よ。其の意義の明不明、通不通、必らずしも之を言ふを須る。其の他氏は佛陀の教法の字を譯するに常に "The law of suchness"

(*tathāvum.*) の語を以てせり。(第一第三頌)

更らに新舊漢譯三種を探りて之を比較し來らば、功德鑑の譯は兩種共に専ら意を得るを主として、文字に拘はらず、間、抄畧するところあり、特に第一譯を以て然りとなす。而して已れか意を以て改竄修補するところ亦甚た多し、例之へは第四十四より第四十六頌に至る三詩を譯して、

修行五戒斷五邪、是亦大王所忘念、

五邪若增劫功德、王當除滅令莫長、

信等五根衆善源、是宜修習令增益、

身見戒取及疑結、此三能障無漏道、

王若毀壞令散滅、聖解脫法當現顯、

譬如盲人問水相、百千万劫莫解了、

欲求涅槃亦如是、唯自精勤後方證、

欲假眷屬及智識、而得之者甚難得、

是故大王當精進、然後乃可證寂滅、

となすが如き、以て其の一班を窺ふに足る。唯其の意義の明晰にして、措辭の巧妙なるに至りては、他兩譯の遠く及ばざるところたり。功德鑑の第一譯は七言四句を以て一詩を譯し、間々六句乃至八句以上に涉れるなしとせず。第二譯は五言四句一詩を譯するを以て常となすといへども、而も又時ありて

は二句一詩を成し、時ありては六句乃至八句以て一詩を翻す。

義淨の譯は功德鎧のに比しては稍文字に顧慮するところあり、或は五言、或は七言四句以て一詩を成す。彼省略すると

ころ多からずといへども、漢文の簡潔を尚び、加ふるに詩形を以てす、其の意義の晦澁にして暢達せざる、亦已むを得ざるものあるなり。然りといへども新必ずしも是ならず、舊必らずしも非ならず、例之へば第八十九の詩の如き、功德鎧は之を譯して(第二譯)曰く

若墮畜生趣、繫縛殺害苦、貪害狂亂心、

怨結更相食、

と義淨の譯は則ち曰く

或入旁生趣、殺縛苦互親、遠離於寂善、

更互被艱難、

と吾人は明かに前者の文義共に全くして、後者の曖昧不明なるを見る。然れども又第九十の詩を譯して

或爲取三珠寶、毛尾皮肉骨、由是喪身命、解剖斷截痛、駿足有三大力、穿頭服乘苦、狂逸不調訓、策勤而榜楚、

と功德鎧の第二譯にいへるものは餘りに敷衍に過ぎ、寧ろ第一譯の

或爲明珠羽角牙、骨毛皮肉致殘害、

第一譯

(急論完)

勸發諸王要偈の 釋者に就て

南條文雄

龍樹菩薩烏陀愈那王に與ふる書を、松本君は西藏譯より譯述せりとて、其敘論を、政教時報に公けにせらる、此の如きの業は余輩の最も歓迎する所なり、其漢譯三部の第一は龍樹菩薩烏陀愈那王説法要偈、第二は勸發諸王要偈と名く、共に是れ西暦紀元後四百三十一年に、求那跋摩の譯する所に係るとして、余の譯補せし三藏聖教目録には、第二譯を僧伽跋摩となす、恐らくは誤ならんと教へらる、君の厚意は深く謝する所なり、因て其誤れる原因を略述して之に酬ひんとす、請ふ不避を恕せよ。

明治十三年九月余牛津より龍動に到りて、日々印度事務局の圖書館に入り、故岩倉公の寄贈せられしと云ふ黄葉版の明藏を閲覧せり、其結果を謂ふ所の目録とす、然れども藏中の書を借り出して返へざりし人ありとて、一一に其書に就て其譯者の名を寫し出だす事能はず、故に藏中の諸目録等を参考して之を補ひし事少なからざりし、何んぞ料らん今此問題の如きも其一例ならんとは、縮刷大藏經藏字八の八十七紙左より八十九紙左までに第一譯あり、宋蜀賓三藏求那跋摩譯と

爲人乘駕不自在、恒受瓦石刀杖苦、
を以て勝れりとなし、而して義淨の

或被殺縛苦、求珠尾角皮、錐鞭鉤斬頸、
踏柏任他騎、

といへるは、尙ほ一層の簡を加ふ。

其他、功德鎧が第九十二頃の前半を譯して或身如太山、咽口若針鋒と曰へるか如きは、全然其の意義を變にするものなり。此類新舊共に極めて多し、今一々之を例せず。

西藏語は元と是れ漢文の如く窘束せず、乃ち其の譯すると西漢譯に比して一層の眞に近くして自由なるものあらん。蓋し漢譯の義は悉く西藏譯に包藏せられて、而して西藏譯の義未だ漢譯に盡くさるものあり、乃ち西藏譯の漢譯に勝れるを失へるにより、今之を考ふるに由なしといへとも、思ふに又漢譯に比して一層の眞に近くして自由なるものあらん。蓋し漢譯の義は悉く西藏譯に包藏せられて、而して西藏譯の義未だ漢譯に盡くさるものあり、乃ち西藏譯の漢譯に比して、一層の明晰を加ふるあるに於てをや。

ウエンツエル氏の譯は、旁諦甚た勉めりといへども、亦間々謬誤なきにあらず、而して佛教套語の困難なる、譯字の其の當を得ざるあるは、亦深く咎むべきにあらず。吾人は寧ろ氏によりて、龍樹の書か、泰西社會に紹介せらるゝに至りたるの勞を感謝せざるべからざるなり、呪んや其の書の漢譯に比して、一層の明晰を加ふるあるに於てをや。

あり、同八十九紙左より九十一紙左までに第二譯あり、宋天竺三藏僧伽跋摩譯とあり、同九十一紙左より九十四紙右までに第三譯あり、大唐三藏法師義淨の譯なり、然るに縮刷本の第二譯の第三行の冠註に、譯號僧伽三本俱作求那とあることを發見せり、此れ松本君の教を煩はせし一の原因なるべし即ち宋元明の三本には第一第二の二譯共に求那跋摩譯とせること明かなり、加之縮刷本第一譯の第二行の冠註には、譯號那跋摩の蜀賓人たりしと、僧伽跋摩の天竺人たりしとをも辨せず、梁の高僧傳(縮刷致二の十六紙左第十五行)に明かに僧伽跋摩が勸發諸王要偈等を續出すとあるにも注意せずして、明りに三藏法師又は天竺三藏求那跋摩として第一第二共に同人の譯とせしこと明かなり、余の目録は固より黄葉版明藏の目録なれば、第二譯を何の説明をも加へずして僧伽跋摩の譯とせしはいかにも誤りなり、此れは當時其書籍さへ圖書館中に現存したりしならば出來得べからざる誤にして、必ず此説明を加ふる歟、或は宋元明三本の誤に盲従せし事なるべし。

求那跋摩は西暦四百三十一年即元嘉三年正月に南京に來りて翻譯に從事し、同年九月二十八日祇洹寺に歿す、春秋六十有五、高僧傳にあり、僧伽跋摩は西暦四百三十三年即元嘉十年に南京に到り、其年九月を以て長干寺に於て五部を譯出し、

元嘉十九年西域の賈人に隨ひて船して外國に還り、其終りを詳かにせずと見へたり。

諸目錄の中に勸發諸王要偈を僧伽跋摩の譯とせるもの左の如し、

第一、梁の僧祐の出三藏記集卷第二(結一の十左)に、勸發諸王要偈一卷(龍樹菩薩撰等右五部凡二十七卷、宋文帝時天竺三藏法師僧伽跋摩於京都譯出)とあり、

第二、唐の靖邁の古今譯經圖記卷第三(結二の八十二左)に、僧伽跋摩譯龍樹菩薩勸發諸王要偈一卷等、總五部合二十七卷とあり、

第三、唐の智昇の開元釋教錄卷第五(結四の四十四左)に、勸發要王要偈一卷(龍樹菩薩撰、第二出、沙門僧伽跋摩譯云々とあり、

第四、智昇の開元釋教錄卷第四(結五の九十左)には三譯を列記して、第一譯の下には宋蜀賓三藏僧伽跋摩譯(出唐)とし、

第二譯の下には龍樹菩薩撰、宋天竺三藏僧伽跋摩譯とあり、

第三譯の下には唐三藏義淨譯とあるなり。

第五、唐の圓照の貞元新定釋教目錄卷第七(結六の四十一左)は第三と同し、

第六、元の王古の大藏聖教法寶標目卷第八(結八の三十五右)には三譯を列記して、右三本、本同譯別とあり、此は譯者の名を擧げられとも、前後に準して知るへし。

第七、元の慶吉祥等の至元法寶勘同總錄卷第十(結八の七十



池山榮吉

勞動組合の由來

◎最近社會經濟の發達は、勞働關係の上に著しく變革を來し、主人對奴僕、親方對徒弟の隸屬的關係は、一變して與勞働者(使用者、資本家)對受勞働者(勞務者、勞働者)の自由的關係となり、從前兩者の間に存したる權利義務は、今や單に契約上合意したものゝ外、其跡を留めざることとなつた。勞働契約、即雇傭には、賣買契約と同一の規定を適用すべきものなりとの羅馬法の原則は、千歳の後端なく、夫のアダム、スマス以来其流を汲める經濟學の所說と一致し、勞働者は其の生活費を所得する手段として勞働力なる商品を有するものと看做され、法律はこの商品の自由賣買の權を認めた結果、茲に受勞働者の與勞働者に對するは、恰も賣買に於て賣主買主の間に上下の區別のない様に、全く對等の關係となつた。このことたる、實に勞働者に採つては非常の進歩に相違なかつたのであるが、併し其の進歩は要するに形式的の改善に止ま

り、實質的に於ては却て改惡たるを免かれなかつた。蓋し人の自由なるものは謂はゞ虛器て、實質の補充を待つて始めて其の効を完くするものなので、勞働者が從來人に倚りかゝつて居た境遇を離れて、一朝にして、自由の名の下に獨立の生計を營むに至つたのは、一面から云へば寧ろ心配の種を求めた様なものである。

◎さて法律上に於て自由平等の權を得た勞働者の實際上の地位は何うてあるかといふと、勞働條件は矢張舊に依つて、與勞働者(資本家)一方の定むる所で、若し勞働者の方で之に對し多少隙を容れやうとしやうものなら、縱し其の要求が公平の眼から見て至當のものであつても、それこそ實に不埒極まる潛越の沙汰と看做される、即ち與勞働者の方では、依然として舊の御主人風を吹かして居て、勞働者のいふことは耳を傾けず、法律の認めた與勞働者受勞働者の對等といふことは、有名無實に歸して了ふのである。全体當時に於ける自由萬能主義の經濟學及び立法が、雇傭を以て全然賣買と同視したに就ては、二個の點に於て誤謬があるので、是からして二様の結果が現はれて来る。即其第一の誤謬は、勞働契約にて普通の賣買と異なり、勞働者の賣らんとする物、即勞働は、其の人と不可分の關係を有する點に存するので、是より生する結果は、勞働の買主、即與勞働者は、勞働者其人に就て支配の權能を得ることである。されば勞働條件を定める者

は、單に労働の分量及び價額を定むるのみならず、其定め方如何に依つては、労働者の身体、生命、知識、道徳、家族的生活等に至大の影響を及ぼすものである。然るに此の條件の決定が、専ら與労働者一方の手中に歸し、其の弊に堪へずして、國家が立法の手段に依つて救濟の策を講じ、労働者其の人に對する與労働者の支配機能に一定の限界を劃し、以て労働者の利權を保護せんとするものが、所謂労働者保護法で、労働者保護法とは、嘗て本誌第九十三號に論じたる如く、労働の時間、工場の設備、女子及び少年の労働、其他諸種の事項を規定して、労働者の生命健康を保護し、家族的生活を可能にし、道義的觀念を維持し、獎進することを圖り、彼れ労働者の階級をして、爾余の階級と等しく。現時文明の澤に浴せしむるを以て目的とするものである。併しこの労働者保護法の規定は、女子及び少年の労働者に關して最も詳しく、成年男子の労働者が、與労働者に對して適宜の生活條件を確保するに就ては、多くは労働者自身の驅引に任してある。

◎第二の誤繆は、労働者は通常其の労力を賣るの外、生活の資を辨ずるに道なき境遇に在り、從つて労働契約に在ては普通の賣買に於けると異なり、賣主、即労働者は其の供給(勞力の)常に需用の高に應じて加減し鹽梅することが出來ないといふ點に存し、是より生ずる結果は、労働者は賣却に就て責任あるものに非らず、換言すれば、賣ると賣らざるとに就

は夫れ以下にまで下落する所であるは、勢の免かれざる所である、由是觀之、労働契約の自由といふことは、單に買主即與労働者一方の自由に過ぎないて、賣主即労働者に採つては更に其の實なく、労働條件は與労働者勝手に之を定め、労働者は毫も其決定に與らぬといふとを意味するものと云はなければならぬ。

◎此の如く労働者が非常に不利益の地位にあるは、畢竟労働者各自分が個々孤立の態度を探るに因るものなることを看破し、利害を同くする多數の労働者が一致團結して、與労働者に當るに足るべき一大勢力を形成し、茲に労働條件の決定交渉の道を開き、以て其の經濟的社會的公益を保維し、増進せんとするもの、即是れ労働組合の目的である。労働組合は労働者が自助的に其の社會的地位の改善を計る最重要の手段であつて、労働契約に關し立法の豫定したる關係、即當事者雙方(受、與労働者)の自由といふことは、この手段に依るにあらざれば、到底之を事實に現はすことは出來ないのである。

労働組合の本質に關し、猶一つ注意すべきは、労働組合は、現在行はれつゝある資本的經濟制の範圍に於て其目的を遂行せんとするもの、從つて夫の現在の經濟制に代ふるに、其產的經濟を以てせんとする、所謂狹義の社會運動とは大に其趣を異にすることで、孰れも其の主眼とする所、労働者階級の利益にあるの故を以て、兩者を同一視するが如きは玉石を辨

て、事實上自由選擇の餘裕を有しないといふことである。労働者が其労力を賣らんとするのは、市場の模様に由るのである。生計の爲めに餘議なくされるので、縱令一時需用が減じたからといつて、供給を控目にする譯には行かない、否、需用が減すれば減する程、供給は益々反比例的に増加し、且つ競争の結果、勢ひ從前より一層不利なる條件が之に附着することとなる、或は勞賃の安くなることもある。然らば若し此反対に需用が増して來たらば何うといふことが出來ないて、茲に所謂労働豫備兵なるものが成立する。然らば若し此反対に需用が増して來たらば何うといふに、此の場合にはまず右の豫備兵が繰り込んで欠を補い、それでもまだ需用は満たすに足らないといふ時に至り、茲に始めて労働の代價の上騰を來すので、且つ勞賃の上騰は他の賣品に於けるよりも、比較的遅々たるが例である。而して斯く需用の多い時期が久しく打續けばよいが、一旦需用の増加した後、恐慌か何かで俄かに需用の減する様なことがあると、又例の豫備兵が編成されるのみならず、其員數は、一時需用の急なるを見て、他業より轉じたるもの、又は他の地方より入り込んで來た者等が加はるから、前よりも彌増しに殖や、競争は愈々劇甚となり、其結果生存競争に於ける最弱者の提出する條件が、一般労働者に對して標準となつて、遂には勞賃が、慣習上僅かに生計を支ふるに足るだけの最少額、甚しき

せざる速了の見といはざるを得ない、後者の架空的なるに反し、前者の實際的なる到底日を同ふし語るべきものではないのである。

◎最もよく發達せる労働組合を標準として、其の組織の綱領とも看做すべき條項を舉ければ、労働組合は、同種の業務に從事し、利害を同くする労働者のみを以て組織するを原則とし、全國を通じて可成多數の労働者を抱容せずとする傾向がある。而して、當該業務の行はれて居る國內各所には、組合員の一定の數に應じて、労働組合支部の設けがあつて、支部會及び支部書記が之を指揮管理して居る。それから國內の主たる當業所在地には、労働組合の執行委員といふものと、書記總長といふ役があつて、是が謂はゞ組合の本部を形作つて居る。而して決定の権は、執行委員に屬すること、なつて居るが、實際は大抵書記總長の意見が行はれる。組合員は組合に入るとき加入金を拂ひ、又毎週一定の出資を受取り、管理する権があるが、併し其金は支部のものではなくて、労働組合其のに屬すると、なつて居るので、執行委員は何時たりとも支部所管の金を處分を得る権能を有つて居る。組合加入の資格

としては、加入者は堪能なる労働者なる旨の組合員二名の保證、及び加入者は當該地方に於ける普通の労働賃を取得し得べきことの證明を要するので、苟も同業の労働者であれば誰でも組合員になることが出来るといふのではない。で、若し當該労働者が、加入後前示要件に相當する能力のないものと認められるときは、直ちに組合より除名される。組合が斯く加入資格を嚴重にする所以は、若し組合員中に無能の労働者があると、其者の取得する低い労賃が、組合員全体の労賃に影響を來す虞れがあるからで、組合の利益を保護する上から見れば蓋し已を得ぬ方策なのである。

⑩労働組合の第一の行動は、労働市場の均衡を計ることで、先づ其手段として組合の採る方法は労働紹介である。即各支部に於て、支部書記は一面に於て、失業労働者の帳簿を作成し、他面に於て労働の需用、即、明口を調査し、明口のあり次第、失業労働者を其方に遣はすこと、且つ毎月支部に於ける失業労働者及び労働明口の數及び性質を詳示し、當該業務の狀況に就て極簡單に報告することになつて居て、本部の書記總長は、此の報告に基いて、場合に依りては、労働の需用少き地方の労働者と、組合より旅費を給して、労働の需用多き地方に轉ぜしめることがある。けれどもこの轉地といひ、労働紹介といひ、孰れもたゞ各地に於ける労働の需用を平均し得る場合にのみ有効の方法であつて、労働の供給が絶対に超過したときには役に立たない、て、此場合に處して、労働市場の狀況を甚しく労働者の不利益とならない様に維持するには、一時剩餘の労働の供給を見合せる様にしなければならない、而して之を見合せるに就て是非失業労働者の失業の爲め、衣食に窮しない様にしなければならない。此の如く労働を爲す能力あり、また労働せんと欲するも、同業者の利益を維持するの必要上、一時労働の供給を見合す者にて、組合より贈與（生活費）を爲すことを、組合では失業労働者保護といふので、この方法は労働組合の行動中、最も重要なものゝ一である。之と同じく、或る組合に屬する労働者にして、或労働條件を不當と思惟するときは、例へば自己の能力に比して労賃が安過ぎると思料するときは、之を支部に訴へて判定を乞ひ、支部が其請求を是認したときには、今度は更に雇主に對して労賃の増額を求める、聽かれざるときは、其地位を辭しても、再び適當の業を得るまでは組合より贈與を請けることが出来る。個々労働者の労働條件に對する態度は、右の方法を以て擔保することが出来るが、一地方全体、若くは或る工場全体の労働者に關しても、亦同様の手段を探ることがある。即或る支部組合が、其地方に於ける當該業務の一般の狀況上、労賃其他の労働條件の改正を請求し、又は與労働者の側よりする労働條件の變更を拒絶するを以て、當を得たる處置と思料するときは其旨を本部の執行委員に訴へ

て其判定を乞ひ、執行委員が其請求を是認したときには、當該地方の労働者は、委員を撰定して與労働者と交渉せしめ、若し其交渉が纏まらざるときは、同盟罷工、即ストライキを爲し、罷工中は組合より引つき贈與を受けることが出来、勞働組合の行動は、此に至つて其頂點に達し、労働市場の均衡を計るといふ範囲を超越して、受労働者對與労働者の均衡を計るといふ範囲を超越して、受労働者對與労働者の勢力問題の圈内に進入するので、労働條件の決定は、生命なき物と物との間に起る現象の如く、單に機械的作用に依て左右されたるものでなく、利害を異にする人と人との間に於ける出來事なりとする以上は、労働者の自衛的手段として其必要を認めざるを得ないのである。

以上は労働組合の主たる行動で、受労働者の與労働者に對する不利益なる地位は、是に由て始めて確乎たる壁障を有するに至るものといふべく、労働組合が労働者に採つて必要の設備たることは、前來述べたる通りであるが、其社會全般に對する利害如何、此の點は次回に於て論ずること、しやう。猶労働組合中には、以上述へたる行動の外、疾病、災害、養老等の相互保険、消費組合等の行動を兼ねてるものがあるが、是等の事項を労働紹介の本質に關するものでないから畧すること、しやう。

歐米各國に於ける宗教の特色

近角常觀

歐米各國に於ては、宗教が著しく社會の總ての部分と關係を有つて居つて、例へば政治上であれ、若くは教育上であれ、又社會上の事件、殊に社會問題、勞働問題その他ありとあらゆる、事に關係を有つて居る、試に何れの部面に關する著書と雖も、これを繙く時は、必ず宗教の關係に就て何等か記載してある、勿論其の宗教の利害得失に就て論すれば、長所もあれば又短所もある、けれども兎に角社會と密接なる關係を有つて居ると云ふ點に於ては、誰も拒むことの出來ない點である、而して斯の如き關係を來たしたのは一朝一夕ではなくして、皆な其の國家の成立を始として歴史的に關係を有して居るのである、故に歐米各國の宗教を研究するには、此の歴史的の點に着眼せねばならぬことである、從つて其の各國の歴史が異なり、各國の國民の氣風が違ひ、殊に政治上の關係の點よりして、宗教の上にも各々特色を示して居る、勿論宗教其のものは世界的のものにして、信仰其のものは決して國と云ふものに依て異なる可き性質のものではなけれども、宗教界の經營、實際の事業に就ては著しく各々特色を有つて

居る、今其の特色をば略して^{りべく}舉げて見やう。

四
九

亞米利加の宗教は、社會的と云へる點に於て著しく發達をし、居る。全體亞米利加は、商工業の國である、従つて宗教が、其の社會に應ずべき様な形をとつて居る。宗教は、人生の救濟であるとして見れば、其の人生の狀態が時世に従つて變化するに隨ひ、宗教も亦其の形を變へて來るは、自然の勢である。全體亞米利加に於ては、新教の各派が頭を並べて發達して居る。殊に社會事務に從事して居るメソヂストであるとか、又バブチストであるとか、其他一々數へるならば無慮數百の教派が散布して居る。是等の宗派が當初殖民時代の時からの關係を以て各地に根據を据へて居る。例せばボストンは、素とビニリンタンの殖民した所であるから、今でも自由の思想が盛んである。デルフ^ダヤの如きも、クエーカーの根據を置いた所であるから、つて、宗教上に就ても新しい思想の中心になつて居る。ユニテリアンの如きも此の地に於て根據を据へて居る。又フ^ダニアでも其勢力が盛んである。バアチモアは、舊教の根據地であつて、今でもカーテナル、ギボンと云ふ人が此の所に居つて、亞米利加全體の舊教を統一して居る。此所に一つ注意すべきことは、亞米利加が全體新教の盛なる所なるにも係はらず、漸々舊教が著しく勢力を占めることである。全體十九世紀に於ける舊教が教線を擴張したことは、驚くべき結果を來

寄付金が二千四百萬圓である、而して殊に昨年は諸種の會社に於ける製造業に從事して居る人々を入會せしめたが、其の數四百萬人の加入者があつた、又鐵道作業者を入れたのが五萬人以上あつて、學生が四萬人以上、又別に子供の部分があつて五萬人、其他陸軍にも海軍にも土人の間にも種々と便利を與へて居る、殊に昨年は海軍の青年の爲に集會所を設けた、此の青年會の中心が亞米利加の各市には殆んどない所はない、殊に紐育の本部及び市俄古の中央本部は、非常なる建築であつて、宗教的、社會的、教育的、體育的の各部が種々の施設をして居る、又下層の社會に向つては、例の救世軍が大に社會に働いて居る、其他監獄の改良にせよ、惡少年の感化にせよ、墮落せる婦人を救濟することにせよ、夫々改良の策が立て居る、唯々亞米利加の社會事業の遣り方の長所と短所とを擧ぐるに、規模の大きなのは確に長所である、而して其の遣り方が頗る突飛なのが彼の短所である、全體亞米利加なる改良を爲すと云ふ話であるが、社會事業の上に於ても、確に其の突飛なる遣り方が現はれて居る、甚だしきに至つては、惡きものを感化すると云ふ事の代りに、惡きものを優遇すると云ふ様な弊害が無いではない、これを要するに亞米利加の宗教の特色は、社會的と云ふ一言に收めてあると云うて宜しい。

英
吉
利

英吉利の宗教界に就て其の特徴を見るに、恰も英吉利の國民が保守的である如く、宗教界も頗る保守的である。又英吉利の國民が頗る眞面目である如く、宗教界の事に至つても實に頑固と評せねばならぬ。眞面目に遣つて居る、第一宗教制度が宗教制度である、即ち歴史的に云へばヘンリイ八世の時に羅馬法王と衝突して、英吉利全體の教區を率ゐて、國家を以て經營する所の教會、即ち國立教會をば打立てたのである。而して其の組織は即ち監督教會である、全國を三十六七の教區に分つて各々教監がこれを統轄して居る、而して又これをばヨーク及びカンタベリーの二大教區に區別し、又これをカンタベリーの大教監が一括して居る、此の組織は昔より今に至る迄少しも變更をせぬのである、而して其の英國教會内部の様子を見るに、ハイ、チャーチロー、チャーチの二大潮流が行はれてある、殊に其のハイ、チャーチの遣り方を見ると、殆んど舊教と何の擇らむ所もない、頗る頑固に儀式を守り、香を焼き禮拜を行うて居る、殊に此の香を焼く問題に就て英國教會の三十九條の憲章に照らすに、頗る不當であると云ふので、カンタベリーの大僧正がこれを差止めた所が、異論讐々として屢々貴族院等の問題に登つたことである、如何に其の保守的であるかを現はして居ると同時に又宗教上の問題に就て苟もしないと云ふことが能く現はれて居る、又神

して居る、此のペアチモアは新教の中でも厳格なる實行を主として居るメソヂストが勢力を占めて居る、其他各地々々諸種の教會が行はれて居る、而して亞米利加全體に通じての氣風は、信仰と云ふよりも社會と云ふ點が主になつて居る、例せば輓近紐育、ボストン、バフェロー等各地の教會に於てイヌチチニーショナル、チャーチ、即ち組制的教會と號くるものが盛になつて居る、これは從來の如く、教會を以て單に日曜日に於ける禮拜の場合と定めずして、其の周圍には青年の寄宿舎、勞働者の集會所、其他諸種の俱樂部等を以て満たされてあつて、日曜日に限らず、週日でも屢々教會に於て集會をなし、社會の改良、及び窮民の保護を主として居る、又日曜日に教會に集會するに就ても、眞面目なる信仰と云ふよりも、社會的に此の場所に依て一種高尚なる樂を得ると云ふ傾になつて居る、従つて教會内部に於ける音樂若くは讚美歌の歌手などは餘程精選して、人の嗜好に適する様に企てゝ居るらしい、此の點よりして或は教會は遊び場所であると云へるが如き譏りもないでは無い、併しこれは餘程社會と云ふことを主としたる點より來つた結果であらう、又亞米利加に於ては、單に教會の名義に於て爲して居る事業の外に、諸種の社會事業、慈善事業に於て著しく發達して居る、殊に亞米利加に於て最も効を奏して居るのは青年會である、今其の大勢を示す爲に、昨年の統計の一部を擧ぐれば、米國全體に於ける

學校よりも出ることであるが、主として倫敦大學のキングスコレッジより出るものが多い、其の遣り方を見るに、随分古くは英吉利の如く眞面目なる所はあるまい、殊に其の會堂内に於て眞面目に祈禱を上げて居ることは英吉利の特徴である、尙ほ最も面白い現象は、一方に斯の如く國立教會が盛なると同時に、これに反抗して起つたる自由教會が又非常に盛である、亞米利加は別として歐洲大陸に於て自由教會の勢ひある且生氣に富て居ることは、恐らくは英吉利の上に上のものはあるまい、尙ほ社會事業に於ても倫敦ほど盛んなる場所は無い、十九世紀に於ける社會事業の發達に於て種々の事業が出來たが、多くは其の創を英吉利に發して居る、今日亞米利加に於て盛んになつて居る青年會は倫敦に於て、ジョーデ、ターホールは其本部である、斯の如く英吉利が根據であるだけ青年會は英吉利全體及び其の殖民地に非常に擴張されて居る、大ブレデンだけで、中央本部の數が凡そ千五百程であつて、殖民地に於て中央部が凡そ三百程ある、就ては世界中に於ける青年會の成績を擧れば、本部の數が七千五百七で、會

弗蘭西

如く寧ろ佛蘭西の宗教は、危險なと云はねばならぬ程全心を
籠込んで遣つて居る、序に云へば清國に於ける所謂教亂と稱
するものは即ち此の佛蘭西の舊教が入込んで、其の極端なる
主義を實行した結果である、是等の點に就ては、將來東邦問
題を研究する人は深く注意せねばならぬのである、現に佛蘭
西に於ては國家と教會の關係が頗る問題となつて居る、現時
の政府内閣は、舊教徒の正反對の態度をとつて居るが爲、政
府は是等の結社に向つて、諸種の迫害を試み、又教會は飽く
迄これに抵抗して、兩三年間或は議會に於て、甚しきに於て
は暴動に於て混雜を來たして居るのは、確に此の修道院に原
因して居るのである、斯の如く熱心であるだけ宗教の爲に力
を盡す人間も多い、教育事業の如きは古來全く此の舊教教師
の手に委せられてあつて、現今と雖も、事實としては僧侶の
勢力が甚しい、故に佛蘭西政府は此の教會に反對する主義よ
りして、宗教教育を廢するの方針にしたのである、全體歐羅
巴に於ける教育と宗教の關係を見るに、英吉利でも獨逸でも
皆々宗教を教育の中に入れて居る、唯々問題になる點は、何
れの教會の宗教を用ふべきかと云へる點が困難なるのみの事
で、社會の道德を養ふのは宗教に據らなければならん、と云
ふ點に於ては毫も異論は無いのである、獨逸の如きは小學よ
り中學に至る迄、宗教々育の時間は皆な入れて居る、近頃英
吉利に於て宗教々育に就て問題が起つたが、これも唯これを

員の數が六十二萬〇六百二十一人である、會堂の數が七百三十七あつて其の價額が六千四百萬圓以上である、斯の如く發達した青年會も倫敦が源である、又救世軍も倫敦が源で、監獄の改良も亦英吉利が根據である、斯の如き社會事業に力を入れた結果として、英吉利には歐洲大陸の如く、社會民主黨なるものが一向起らん、又現に感化事業の効を奏した結果として、監獄に居るものが漸次數を減じ、惡少年なども漸々少なくなつて來る、これを要するに英吉利の宗教界は、信仰を基として實際事業の上に於て効を奏して居るものと云ふことが出来る、其の大體の潮流は至極保守主義であると斷言して宜からうと思ふ。

佛蘭西

次に佛蘭西の宗教は、舊教である、全體佛蘭西の人民の氣風が頗る感情的であつて、狂熱を有して居る國民である、これに加ふるに舊教の頗る力強き且熱心なる訓練を経たる結果として、其の信仰の有様も頗る過劇にして、まさかと云へば死も顧みぬと云ふ様な有様がある、全體佛蘭西を視察する上に於て極端なる兩面があることを注意せねばならん、一應巴里の市街を表面的に視察すれば、世人も皆云ふ如く浮華なる物質的娛樂を以て満されてある世界の遊び場に過ぎない、又確に見聞に堪へない墮落が行はれて居ることである、さりながら巴里市民自身は、頗る儉約にして且質素を守つて自から

強ゆるとか強ないとか、其の宗教々育の主義を國立教會にするが、自由教會が否かと云ふ問題に於て種々異論を生じて居るのみのことと、宗教其のものを排斥する意味では無いのである、亞米利加の如きは前に述ぶるが如き、澤山なる教會があるが故に唯々聖書を教ふると云へる點に於て、矢張り小學校に於て宗教を入れて居る、獨り佛蘭西に於て宗教を排斥して居るのは、前に述たる如き特別なる國家と教會に關係上大いなる衝突があるもの故、政策より來つた結果である、佛蘭西と雖も、宗教其のものが悪いと云ふ考へではないのである。將來我が國に於ては、道徳の根底を鞏固にするのは是等の點に就て、餘程偉大なる且深慮ある方策をとつて我國に適した宗教を經營して一方には國民の志操を鞏固ならしむると同時に、一方には歐羅巴に於て斯の如き害を及ぼしたる宗教の染浸を避けねばならぬ、これを要するに佛蘭西は徹頭徹尾舊教國であつて、狂熱的信仰が、其の特徴と云うて宜しい。

獨 邂

人も知る如く、ルーテルが宗教改革を唱へた舞臺であつて、新教と獨逸の國家とは離る可からざる歴史的及び精神的の關係を有つて居る次第である、獨逸聯邦は、各々其の州に從つて國の宗教を異にして居る、勿論何れも新教と舊教とを同様に取扱つては居れども、其の王室の宗教が各々異つて居る、即ち普魯西は神教で、バイエルンは舊教國である、其の他佛

や否や、教會より大なる反對を受けて、論難攻撃頗る凄まじく、唯に獨逸内ののみならず、歐洲全體に及んで英吉利邊にても諸種の批評が出て、ナカ／＼一奇觀であつた、勿論此の人の研究して居る原始的クリスチ教のことは、既にオックスフォードの大學生會史の教授ハッチと云へる人の説と殆んど同じで、英吉利には偶には斯の如き人が出るけれども、そ是一部に行はれるので、全體に於て勢力を占むることは無い、獨逸に於ては兎角思想界に於て斯の如き新らしき考へが屢々出で、獨りハルナック而已ならず、ライブチヒの大學生會ゾウムと云へる人の如きも、類似した考へを有つて居る、要するに獨逸は學問的理論の點に於て、大に其の特色を發揮して居る、と云ふて宜しい、一方に斯の如き理屈的であるだけ、信仰の點は意外にも冷淡であると云はなければならん、現に日曜日に教會に行つて見れば、英吉利の如く眞面目でもなく、又亞米利加の如く社會的でもない、又學者學生人民等に就て其信仰の様子を叩いて見ると、餘り感心することは無い様である、然しながら獨逸の特色たる何事も第一番によく研究して、其の研究の結果を實行すると云ふ點は、他に見る可からざることとはなつて居らん、獨逸に至つては、既に歷史的の経過する時に著名なる大學の教授が、殆んど其教會法の名をも知らざる程、一向心に留めて居らぬ、又英吉利杯でも左程重要なこととはなつて居らん、獨逸に至つては、既に歷史的の経過

蘭西に近きライン地方は舊教の盛力盛んであつて、チュウウリ・ンゲンの七州は宗教改革の本場として新教が盛んである、スツットカルトは獨逸の新教中最も健全に發達して居つて、慈善事業の如きは最も具備して居る、又佛蘭西より分割したるアルサス、ロートリンゲンの二州、及び東方に於けるボーランドの獨逸に屬したる部分の如きは、素より舊教の盛なる地であるが、陰に陽に獨逸的勢力を植込うとして屢々國家は舊教徒の反対を蒙つて居る、これを要するに獨逸は新教の根據地ではあるが、反対改革の時及び舊教に取返された爲、其の半分の勢力を失つて、現時は舊教と事々に相争ひつゝあるのが獨逸の宗教界の状態である、獨逸の國民が全體に理屈的であり、學問的である如く、宗教の上に於ても神學の研究より、教理史、教會史、教會法の研究等を始めとして、宗教哲學等總て宗教に關する學問的研究はナカ／＼盛である、伯林大學を始めとして獨逸、瑞西に於ける三十有餘の大學生に於て必ず神學科の設あつて、或は新教を主とし、或は舊教を主とし、或は新舊兩教を研究して居る、而して獨逸人は、恰も思想界の上に隨分珍らしき考へを出す人が多い如く、宗教の上に於てもナカ／＼違つた考へを出す人がある、近頃著しき問題になつたのは、伯林大學に於て教理史の大家たるハルナックと云ふ人の考へである、此の人はクリスチ教の真髓と云へる講義を千九百年の冬大學生にせられたが、夫が出版になる

らん、先づ斯の如く理論的研究を主としてこれより成立たる結果を實行するが、獨逸宗教の特色であると云うて宜からう、又慈善事業等も隨分盛ではあるが、皆な同様によく研究して實行する方針であつて、英吉利が實際の點より發達して理論を後にするのと恰も正反対の感がある。

餘 論

以上は歐米に於ける最も興味ある、最も著しき四ヶ國に就て其の特色を略述したのである、其の他露西亞の希臘教會はこれ又極端なる壓制極端なる國家主義であつて、其の下に養はれた國民は又精神的に宗教の權威を免れることの出來ない様に養成されて居る、露西亞が歐羅巴中獨り專制的の國體を今日まで維持したのは全く此の宗教が其勵したる結果である、されど漸次新らしい思想が起つて、トルストイの如きは教會より破門せられ、又大學生は屢々騒動を惹起す等のこともあり、遂に露西亞皇帝は宗教の自由に就て詔敕を出された次第であるされど我々は其の國民の兎も角も宗教の信仰の深く養はれて居る爲に力強くなつて居ると云ふことを注意せねばならん、其の他伊太利は羅馬教會の根據だけあつて、其の勢力は盛んであるが、國の勢としては餘程衰へて居る、其の他瑞西、和蘭、丁抹、瑞典等は獨逸と同じく新教の國であつて、白耳義境國又南の方では西班牙、葡萄牙は佛蘭西と同じく舊教の國である、他は大體前に挙げた四ヶ國の大勢を以て押して見れば想像することが出来る。

(完)

家
**信
**

清澤先生と哭す

明治三十六年六月六日清澤満之先生其郷里三河國大濱西方寺に於て逝去し給ふ、嗚呼哀哉。先生は實に近代の偉人也、教界の柱石也。先生に親炙するや、弟子各其意を盡して、言はむと欲する所を言ふ、恰も赤子の慈母の清懷に戯るが如し、先生一たび去りて吾人赤子の慈母を失へるが如し、冥想追憶心中の寂寥を感じずると共に益々先生の偉大なりしを感じずんばあらず。先生の世に在るや弟子各能を盡して行はむと欲する所を行ふ、恰も兒童の嚴父の膝下に遊ぶが如し、先生一たび去りて吾人兒童の嚴父を失へるに似たり、悲哀慟哭其歸する處を知らざると共に先生の遺志の空しくすべからざるを想ふ、嗚呼哀哉。回顧すれ

續 靜 觀 錄

近 角 常 觀

(二) 靈化、物化

ば、明治二十一年先生京都に入りて、教界育英の事に従はる、宗門の教育肇めて起る。一年有餘を経て先生切實なる求道の精神に驅られて、法を四方に求め、苦心慘憺幾多の経験嘗め盡さるこなし、先生の病、此時に胚胎す、然ども病を免めて業を授け、口頭血を飛ばすに至る、教育機關の經營漸く備る乃ち親友の勧告に従ひ、病を舞子に養ふ。明治二十九年宗門改革の事あり、奮然身を捧げて其衝に當る、教界の精神此時に於て振作す。三十二年居を東京に移す、爾來四年一方には宗門教育の機關を經營し、一方には信仰の問題を鼓吹して青年の修養に力を瘁さる。今や先生の薰陶を蒙る者幾百人、皆先生の計を聽きて、悲泣嗚咽せざるなし、嗚呼悲哉。今や先生如來淨華の聖衆として親しく、無上法王の膝下に見に給ふ、弟子皆先生の遺志を成さむことを誓ふ、冀くは照鑑を垂れ給へ嗚呼哀哉。六月九日西方寺に於て葬儀を執行せらる

世界の事は、唯見ただけ、聞ただけて、其已上はないものとは、とても思はれない、我々が知覺する範圍だけで、其已上に奥底がないとは、述も考へることが出来ない、昨日まで其聲を聞きつゝあつた人が、死なれたとて全く滅したとは述も思ふことが出来ぬ、死すると云ふは畢竟形骸の上に於てのみ言ふことであつて、其精神は千古生きつゝあることである、其心靈は遠く去りても、又眼の前の物を見るが如く、丁々として照覧せらるゝことである、若し此事がなかつたならば世界は無意味である、人生は暗黒である、勿論死は愛情の生木を折り碎くもので、實に是程の脇を傷ましむることはなく、然れども若し死が果して永久の死であつて靈的の感應までもなくなつたならば、夫こそ實に絶體絶命の悲哀である、然るに幸なことは、假令ひ、形骸の上では杳として相分れても、心靈の上に於て存在して、洋々乎として其上に在すが如く、其左右に在すが如くあるは、實に吾人の見聞已上に超越せる靈界の力である、此の如く靈化されたるときは益々神聖にして、益々確實となる次第である、而して此靈化なるものは獨

り死の場合にのみあるものではない、常に此作用の存在することを注意せねばならぬ、たとへは親子、兄弟、朋友など親しさ間柄にして、遠方の旅にて、又色々の事情の爲めに必ず同居することの出来ぬ時は、矢張此靈的感應によりて、相交ることが出来る、こは單にかく思ひなすのではない、事實として確實なることである、見聞する事物の確實なるほど同様に確實である、吾人は勿論俗的に存在して居る己上は形骸の上に於て親しみを見出して、容易に其執著を脱することの出来ぬものなれど、愈々なりたとき、結局此大なる靈界に於ける事實の確かなが爲めに、大に餘裕の存することである、親鸞聖人が久遠切より流轉せる苦惱の舊里は捨て難く、未だ生れざる安養の淨刹は戀しからず候こと、よくく煩惱の強盛にこそ、娑婆の縁つきて力なくして終るとき彼土へは参るべき也とは如何にもよく靈的の永久の存在を確實に言ひあらはされたものである。

親鸞聖人が法然聖人の臨終の様子を述へらるゝとき最も明瞭に此靈化的言語が用ひられてある、「淨土に還歸せしめたり」と云ふてある、而して此靈化的の言語は平生に其人を靈化してみる力が出來て居らねば、俄かに靈化して見ることが出來ぬ、人が死ねばとて直ちに之を佛と見ることは出來ぬ、寧ろ生きつゝある時に其人を通して佛の作用を見る力がなくてはならぬ、親鸞聖人は確かに法然聖人に於て其力を認めて

居られた、即ち法然聖人を以て大勢至菩薩の化身であると眺めて居られた、大勢至菩薩とは即ち佛陀の智慧である、即ち法然聖人の人格を通して佛陀の智慧が塊りて法然聖人となられたと見るのである、故に物を靈化して見る力のある人は又靈を物化して見る力がある、而して物の靈化することが確かな事実である如く、靈の物化するは確かな事実である、智慧の塊が法然聖人であつた如く、又慈悲の塊が聖德太子であつたのである、即ち觀世音菩薩が聖德太子と示現せられたのである、親鸞聖人の此思想は廣く其家庭の間柄まで及びて各其人格を通じて佛の慈悲を眺めて居られたのである。此の如く物が靈化し、靈が物化する思想は信仰の實驗上免るべからざるものである、此に至りて私は初めて事理圓融の意味が明らかになりて來た、從來は事理圓融と云へることを單に哲學的の論議を以て左右することとして居つた、私は初めて宗教界に於ける幽明の事實を確信することの出來なんだとき、之を心中に運び着ける唯一の手段は此事理圓融の教理であつた、即ち眞如の理体は萬象の事物と圓融無碍のものである。

『天人論』と讀む

補 龍 造

るゆへに苟も眞如の存在がある己上は是非とも幽明の事實の存在は疑ふべからずといふ理的説明であつた、かく理論には説明を得たれど毫も實感が浮ばなんだ、其後佛陀慈愛の救濟が身に浸みたるの後、初めて佛様が我物になつて下さつた、して、近時天然人事の出來事に於て佛陀の力が吾一身の上に加へらるゝことの偉大なるを感じ、物が靈化し、靈が物化する事實を心中深く感得し來ることである、此に至りて從來とは大に趣を異にして、吾人が知覺を超絶する大なる靈界の力を認めてから初めて事理圓融の味が實驗することが出来る様になつた。

抑吾々人生なるものは、必ずしも物的に満足なるべきものでない、此時は此大なる佛陀慈悲の靈的満足を以て救濟せらることである、故に寧ろ人は不幸に遭遇して物質的な不完全なる部分、世俗なる部分が無くなりて純粹に靈化したるとき殆むど完全圓滿なる靈を見ることが出来る、又佛陀慈愛の靈的救濟は人生を超絶して居ては吾々は中々味へぬ、夫故吾人の手に達する様、吾々の胸に届く様に、色々に物化して其聲を聞き、其形を見、直接人格を通じて其智恵の光明を吾々の心の中に融かし込まれたとき、佛陀無縫の大悲を感佩する事が出来る。

故中江兆民君の「無神無靈魂論」を讀んだ人は、黒岩周六君の「天人論」を讀むの必要がある、中江君は死に臨んで唯物一元を説き、無神無靈魂を主張せられた、其所説陳述淺薄なる歐洲十八世紀哲學の殘影に過ぎぬけれども、彼の確乎たる信仰がそこに宿してあるので價値があるのである、翻譯小説家として新聞經營者としての黒岩君の姓名は、嘗々として世上に傳てあるけれども倫理宗教形而上の問題に對しての彼は從來零位である、零位の人が今や奮然として「余は心的一元論の所説に基き、自ら信する所を述べて此書を作れり、若し智識として心的一元論を講述するは別に其人ある可し、余は余の信仰を告白するなり」とふ意味にて「天人論」を公にせられた、彼の所謂唯心一元論、神論、萬有理教、生命一体の向上主義なるものは、最近の理科學上の穩健なる研究を基礎として發表せられたものである、然も生命ある信仰として主張せられたので

ある。故に之を読んで深刻の印象と津々たる興味を禁ず得ない、「无神无靈魂論」と「天人論」とはよき「コントラスト」である、學者も非學者も之を一讀すべく十分價値がある、「天人論」の一書は、物質の本性宇宙の實体人生の覺悟道德の根底靈魂の未來宗教の眞趣の六章より成り立つて居るのである、物質の本性を論じては物質は皆活けるものにして「動は即ち精神なり」と斷定されました。宇宙の實体に於ては萬物は无窮无限に聯繫して宇宙は一体なのである、之を他觀せば物質なるべきも之を自觀せば宇宙は心靈に外ならない。プラトの比喩の様に「人は窓を背にし壁に向て坐せり」であるから、物質てふ影をみるのみであるけれども、若し面を窓に對すれば心靈をみとめ得るのである、人生の覺悟に在ては、個人は生命より作られたるものにして、生命とは大自觀の一部の表顯にして能く力を作る力である、而して人生は宇宙全体を走れる波形であつて向上進化のため存立するものと云ふて居る道德の根底にては道德の本源は宇宙である、自然淘汰は勸善懲惡である世界の發展は愛の歴史である、吾人は向上のため「現在我」の誘惑を制して「理想我」を遠大にして進めよと云ふのである、靈魂の未來に關しては靈魂は心靈の一部であつて永劫不滅であると決論せられた、宗教の眞趣にては倫理も宗教も同一にして大自觀と同化して悠久三世に活くるにあり、倫理は自力である向上主義である、宗教は他力なりと

此説に服す、故に曰く大理想に導かるるに至りて道德は始て眞趣を得」とせば、これ明に道德は理想を追ふて遂に之に到達すること能はざるもの、宗教は理想を認めて之に到達し得るもの、道德と宗教の二者の間に割然たる區別があると云はなければならぬ、吾人の考察する所によれば此區別は輕忽に附すべからざる尤も重大なるものである、宗教の大理想に到達し得ると云ふは、宗教の宗教たる所以にして、之れあれどこそ宗教の信仰の確實を保持し得るではないか、之れあればこそ笑て水火をふみ白刃を犯すではないか、見よ政治も動き、學問も動き、風俗も動き道德も動き、國も動き人も動きありとあらゆる世の一切のもの皆動搖不定なるのに、大磐石の様に獨り牢平として動かないのは宗教の信仰ではないか、信仰は相對でない絶待である、信仰は不完全でない完全である、信仰は求るのでなくして得られたのである、若し此信仰よりして絶待を奪ひ完全を奪ひ天人合一若しくは佛凡一体を奪ひ去たならば、もはや宗教的信仰と名くべきものでない。のである、人は決して風雨沐浴の旅行のみを以て満足し能はざると同じく、理想追及の旅行つづきを以て満足することは出来ない、完全の影を追ふ不完全の連續を以て満足は出來ない、得んとし至らんとして努力する其事が果して人生唯一の希望であるだらうか、船舶は海上を駆走するのが目的であらうか、港灣に到着するのが目的であらうか、郵便脚夫は街上

云ふも、自力と相合せしめて大自力をなさしむるもので、なればならない、語を換て之を云へば、向上主義でなければならぬ、向上主義は宇宙最元の大自觀が此主義を主義とするのである、而れ宗教の上の宗教倫理の上の倫理である、故に曰く倫理も宗教も此主義に至て唯た一となるのみと、以上はそれが概要であるが、其所說徧々獨斷なる所あるにもせよ、其思想の述べて未だ委しからざる所あるにもせよ、吾人は黒岩君の心的一元論汎神論大靈自觀論に向て淺からざる同情を表するものである、かかる幽邃深奥なる問題に向て、簡潔なる健筆を振はれたるを嘆美するものである、されど其宗教論にては未だ徹底しない所があるのである見解のあやまれる所がある、乞ふ少しく之を述べませう。

(二) 「ウヰルヘルム、ヴァント」の云ひけん如く、「過去は目的たる能はす、現在は寸秒時一過せば目的たる力を失ふ、故に道徳の目的は大なる理想にあり、理想は常に我と共に進みて、常に我の達せざる所にあり」と、又「然れども人の行為益進まば、終に最後の限界に達せざるを得ず、此の限界の境外が即ち眞に理想と現實と合一するの境なり、而かも此境に入るは人の力に及ばず、故に倫理は理想を以て人の達せざるものと爲ざるを得ず、之に達し得べしとするは宗教の範囲なり、感識世界以外の道理を記號的の公式と爲し、以て感識世界を補ふ者即ち宗教なり」とせば、黒岩君は此説に對して「余は

を走るのが目的であらうか、戸々に書狀を配達するのが目的であらうか、理想追及の道德を以て人間最後の目的とするものは、海上の駆走を以て船舶最後の目的とするものである、向上進歩のみを以て目的とするものは、街上を駆走するを以て郵便脚夫の目的とするのである、船にとりて海上の駆走もよくあるけれども、港灣に到着なしの駆走は果して安然であらうか、若し一度颶風に際會したならば、片々段々に分碎し去らぬであらうか、配達なしの郵便脚夫の駆走、これ豈に不安のきはみではなからうか、此不安を除き去りて最後の港灣到着を示すものは、宗教の絶待冥合である・理想合体である、故に吾人の見地より之を云へば、人生要求の終局は宗教の理想に到達するにあるので、道德も畢竟宗教に到達するための過程に過ぎぬのである、道德も學問も國も人も宗教のためにあるのである、されば「ヴァント」の様に一應は道德と宗教とは分ち得らるるなれども、其決歸する所は唯宗教の一である、語を換て之を言へば、追及的道德は花見のための道中である、目的は花見にあるのである、花見終ればまた以前の道を蹠てくるが、此時は、花を求むるにあらずして花の美を友人近隣の人々に分つべくあるのである、追及的道德、苦鬪的道德ではなくして、還相的道德宗教的道德である、

如上の明白なる道理あるにかゝはらず、黒岩君は本末顛倒して宗教を以て追及的道德の下に屬せしめ、際涯なき到着な

き向上進化の旅行を以て、宗教及び倫理の眞趣となすは豈に誤謬にあらずと云ふを得るか、

(二) 黒岩君は汎神論をとられ亦進化論をとられてある、されど二者の調和が甚だ拙ない、汎神論の立脚地より云へば君の所謂自觀によりて宇宙の大靈にふれたときこそ、進化の極點に達したのである、此外に別に進化のある完全に達するため、進化しづつあるのである、我々は此進化のための手段となるべきものである、犠牲となるべきものである、其進化の一部分であつて、固より進化の頂點でもなければ最後の目的に到達するものでもない、汎神論の安心法と進化論の安心法とは相違してある、汎神論によるならば、至る所に大靈をみとめ一切の時に大靈をみとめ、其大靈をみとめたとき絶待に達したのである、「ウバニシヤット」を研究した人の話によれば、「ウバニシヤット」の安心法は、*sun games* であつて、それが来る如くに安心するのである、健康がくれば健康に安心する、病氣が來れば病氣に安心する、富貴が來れば富貴に安心する、貧窮が來れば貧窮に安心する、それが來る如くに安心するのである、佛教では諸法實相と云ひ、柳は綠であるのが實相で、花が紅であるのが實相で、至る所に實相をみとめて安心するものが、汎神教の大精神ではないか、自觀に依て大靈に接した人の考ではないか、汎神論より見れば、進化論は間違た説

南村閑話

劍 虹 生

七。小早川隆景九ヶ條の歌

これは只今では、故人となつた念佛庵主品川氏か。明治廿八年六月八日、わざく書いた吳れた、小早川隆景九ヶ條の和歌である、この小景の文字に無量の趣味が含まれて居るやうである。

一、おもしろの春雨や、花のちらぬほど。
 二、おもしろの儒學や、武備すたらぬほど。
 一、ねもしろの武道や、文字を忘れぬほど。
 四、おもしろの酒宴や、本心を失はぬほど。
 五、おもしろの遊樂や、辱をとらぬほど。
 六、おもしろの好色や、身を失はぬほど。
 七、おもしろの利欲や、理義の道室からぬほど。
 八、おもしろの權勢や、他を毀ぬほど。
 九、おもしろの釋教や、世理を忘れぬほど。

八。修驗宗に就て

先づ修驗宗の事をお話するに當り、維新後の事情を述べて見ようと思う。修驗宗は不幸にして明治五年九月時の政府より廢止の令に接した。爾來廿有餘年間、直接間接一宗獨立の

ではない、去れど一面を見て全面を見ぬ説である、上り坂もあれば下り坂もある、進化論は上り坂を見て下り坂を知らない。地球は今てこそ發達して行くが行く處迄行けば次第々々に破壊し始める、退化し始める、太陽系統全体に就て云ふもソーである、其時進化論者は何んと云ふであらうか、全体宇宙は一の活動である、靈的活動である、進化や退化や波の高まるものである、高まるこれが水の目的であると云はば、誰れか其愚を笑はざるものがありませうか、進化を以て宇宙の大主義と思ひ人生の歸趣であるとするのは、恰も前と一對の愚者である、水に高低の波浪ある様に宇宙に進化退化がある進化でも退化でも至る所に靈的活動をみとめて之に安心するときは進む様に、退くときは退く様に、時處所縁に應してなすべきをなすべきではないか、君の進化主義向上主義は一面の觀察であつて大達觀ではないと思ふ。

「天人論」を読み、淺からざる感興を得、所論多く吾人と旨を一にするものありしが、其宗教論及び人生の大歸趣に至て、大なる相違點を見出せし故、此處に一言して「眞理に従ふに客ならざる」著者足下に呈するのである。

爲め不撓不屈當局者に向て、請願書を提出すること前後殆ど幾回なるを知らぬ程である。けれども台言兩宗の妨害もあり、旁々當局者の更迭等によりて事情容易に疏通せず、荏苒明治廿九年に至りて遂に獨立の事は不認可となり、萬事休するに至りました。修驗宗獨立の請願に關して、最も熱心に運動せられた人は、山根正賢と云ふ余と同國のものであるが。明治十七年以來五畿七道殆ど足跡の至らざる處なく、奔走を究め、有志の寺院二百餘名、信徒百萬人を糾合して請願に及んだけれども、とうとく目的を貫くことか出來なかつた。始め政府に於て修驗宗を廢止すると同時に、其寺院を台言兩宗に附屬せしめた理由は、云ふまでもなく、修驗宗と台言兩宗との教理を同しくするものなりとの誤解より生し来るものにして、修驗宗こそ洵に迷惑千萬の至りである。修驗宗と台言とは固より其宗を異にするもので、此事に關して屢々建白書を出したが當局者は少しも感知せざる様子であつた。維新後神道各派は種々別立して布教の自由を得、法相、華嚴、融通、念佛等の諸宗も漸次獨立し、幕府時代に禁止せられたる不受不施宗、同宗講門派までも獨立したる今日に於て、獨り修驗宗のみ獨立して其教法を弘通すること能はず。高祖の法燈將に滅えんとする次第で、末徒の職にある吾々は悲嘆痛哭の至りである、修驗宗の事に就いては故ありて是まで公にせざりしが、もう私の知れる限り御話しませう。

九。修驗宗の沿革

今では修驗宗と云ふて多くの人は知らぬ位であるけれども、維新前までは頗る盛んなもので、寛政十一年光格天皇の御宇役公小角宗祖に神變大菩薩の證號を賜はれたるを見て之遍五方乎、是以千年之久、馨香遼遠、衆生之仰爪跡益盛、天女之靈夢不空、神龍之嘉瑞爰應、因示特寵、以贈徵號、宣稱神變大菩薩、勅賜を御覽に入れませう。

寛政十一年正月廿五日
勅優婆塞、役公小角、海嶽抖擗之功、古今辛苦之行、前超古人、後過來者、若夫妙法明教之施四海也、非以神足仙脚之遍五方乎、是以千年之久、馨香遼遠、衆生之仰爪跡益盛、天女之靈夢不空、神龍之嘉瑞爰應、因示特寵、以贈徵號、宣稱神變大菩薩、

高祖の修驗宗を創立し玉ひたる當時の佛教の形勢を見るに、天台真言の開宗に先きたつこと實に百有餘年である。三論法相など教相の學問盛に行はれた時代に於て専ら實修實行を主とし、大峰葛城の山獄を以て胎金兩部の大曼荼羅と開示し、山林抖擗の妙行を以て入曼荼羅の行相を建立し、諸人をして滅罪生善の法益を與へたのが修驗宗である。則ち大峰葛城を中心構へ、五畿七道の名山靈地を經歷し、隨處に無相の曼荼羅道場を建立したのである。富士山の如きは古來未た曾て人跡を印せざる高山であつたが、高祖始めて登山の路を開かれし以來、今日に至るまで登山の人絶ゆることなきは、

一に高祖の盛徳と云はねばならぬ。(高祖が富士登山を始め玉ひたる事は本朝文粹に載せてある、都良香の富士山記に見えてある)高祖の規模廣大であつた爲め其弟子方も亦師法を相承し、壽元は豊前の彦山を始め鎮西の諸山を開き。芳元は伊豫の石槌山及び四國山陽の諸山に修行し。黒珍は出羽の羽黒山及び東北の諸山を廻り。山中に起臥して抖擗の妙行を修め、其間に於て信徒を誘導したものである。其遺法千有餘年に亘り、時に盛衰を免れされども以て明治の初年に至つたのである。當時道場を巡拜する遠近の信者は都鄙を通過して風俗を見聞し、山村僻邑の住民は信者の往來するを以て頗る其澤を被りたものである。彼行基菩薩の信徒を誘引して諸國を廻り、人民を教化せられたるは、全く役公の遺法に基かれたることは、行基菩薩の著述せられたる葛城寶山記、金剛山内外院記等によりて窺ひ知ることが出来る。

修驗者は俗に山伏と云ふて其形裝自ら他に異りたるものである。其法具等を見やうと思ふならば、北野緣記繪卷、法然上人傳記、融通念佛緣記等の繪卷を繙けば、中古盛に行はれたことがわかる。彼の西行法師が宗南坊先達に從ひて、大峰に登り十界修行に困難して竊に涙を流せし事は西行繪卷にあらはれて居るが、此十界修行と云ふ事は曾て他宗に無き所の修驗宗の行法である。

又義經記に判官殿北國没落の時、主從共に修驗者の形裝を

かはしき次第である。

一〇。修驗宗大意

(一) 立宗要旨

修驗宗は華嚴經、法華經を以て依經と爲し、更に龍樹菩薩を感見して親傳し玉ひたる密教に依り、高祖神變大菩薩の建立したる一宗である。一切衆生、本來成佛、心佛衆生、是三無差の觀念は華嚴により、諸法實相、治世產業、皆順正法の觀念は法華に依り、六大本有の理觀に住し、五智の妙用を發得するは龍樹菩薩の親傳である、故に顯密一致、萬機普益を以て一宗の要旨とするのである。

(二) 大峰修行

大峰修行は白鳳年中に高祖の創立せられた修驗者抖擗の妙行を修する道場で、修行の法則は先達と新客と其行を異にしまた法具衣体それゝの規則がある。この峰中の修行に十界修行ありて極めて困難なる修行であることは前に述べた通りである。また縁記相傳と云ふ事ありて極めて丁寧なる相傳である。此の相傳を知らざるに於ては、たとへ大峰に登山しても樵夫が只山林を通行すると同しく無意義のもので、曼荼羅道場の義理に通することは出来ない。

(三) 葛城修行

葛城の嶺は華嚴の淨土にして法起大菩薩常住說法の靈地である(唐土より日本に來り始めて戒律を開かれたる鑑真和尚

が葛城に至り、法起菩薩の該法をさへたる事は元享釋書に見ゆ。高祖は此山に千寫の法華經を二十八ヶ處に布配して埋めたのは、これ法華嚴を合したる深理の存する所である。而して此山に一百八ヶ處の修行場あり、諸人をして百八煩惱を消滅する抖擞の行を指示したものである、春分に修行するか故に春嶺修行とも名けて居る。

修驗宗の大意は先づざつとかやうなものである、委しく申せば限りないからこれで止めて置きませう。



文苑

タ

ベ

(The Tables Turned—Wordsworth.)

波岡茂

いざいざ友よ汝が書閉ぢよ
汝が心ゆく時ぞ今
いざいざ友よ汝がまみ開らけ
なに悵然の姿ある

聖者の説ける長廣舌に
まさる訓誨を興ふるなり

優美は自然の御神のまな児
吾等のはかなき淺き智は
自然の美形を害ひ盡し
只散りくに區分つのみ

人の藝術科學を捨てゝ
その荒廢の文字を去れ
いざ來よ友よ心を開き
自然の慈光を仰ふざ嗜よ

○旅人の夜歌

疑獨庵

君天上の子なるかな
うちも、なやみも忘れしむ
憂ひのいとく深きには
くだす慰籍ぞいやふかき。

あゝ奔命にうんじたり
苦痛、歡樂、そはなにぞ

入日は山の端にかかり
色華やかの光線は溶けて
縁の廣野極より極に
夕べの色を染めいてぬ

書は物うく極限なき競争
いで山雀の歌きけよ
妙なる調べに人生の
崇き啓示ぞ含みたる

鷗ほがらかに謡ふを聞けよ
そは法を説く聲ならず
來りて神秘の光に觸れよ
自然を汝が師とあふげ

天府の財は探ぐるに任かす
吾等の心の和平に
豁達の智は健全を
眞理は快樂を辿りて来る

夏の木立に潜める靈は
世の道人の道を説き

愛しき平和よ來れかし
あゝ來れかし此胸に。

(ゲ)

テ

○幸福なる航海

狹霧あとなく打ち晴れて
天空はたかく清らなり
アオルスの神ほとよくも
不安の風紐をゆるめたり
順風こゝちよく、叫きて
水夫はちのづと身を動く
「けにわがふねの疾きことよ
浪のづからわかれ行き
遠隔のものは近つきて
既に陸地を、われは見る。」

○希望

日ごとのわざよ、幸あれな
高きさちをばなさしめよ
われなうませぞ、疲勞しめそ
空しき夢にあらじをや

(ゲ)

テ

此木といへどいつしかも
實をし結はん、影さん。

(ゲ)

(テ)

「よきを成さんとわれ生る。
心の聲の云ふところ
希望の精神をあざむかず。」

(シルレル)

人は夢みぬ、かたらひぬ
よき幸あらむその日をば。
人は走せにき、馳けりにき
黄金色なす幸福追ひて
世は古りてまた若返へり
人長へに改良のぞむ。

希望よ、人を活動かしめ
児童を躍らしめ、その奇しき
光は若き青年さそび
老人と共に消滅えぬなり
愚歩を止むる墓の上に
希望を更に植ゑてゆけば。

汝は幸ある乳のみ兒よ
汝が搖籃こそ汝が身には
なほ限りなき安所なれ
されども成人と汝れなれば
この限りなき天地も
汝が軀に狹隘くならんかも。

(シルレル)

○全

其父母のうせしより
にがき憂愁の身となりつ
富者の園生に咲く花と
黄金の種子とわれを見る
わがたどる路いたづらに
こゝろと身となやましむ
されど静かにうき身もて
たのしき人の間に立ち
日に幸福あれと祈るなり
誠情からわれはしき慰籍を

あはれ、み神よ君は、全く
喜びなくてあらしめず
凡ての人にそぐなり
はしき慰藉を

君が神聖き家はまた
小さき村にも聳え立ち
妙へなる琴と歌の音
凡ての人の

○魔王

誰ぞや斯く夜深きに嵐の中を騎り行くは。
そは子をつれし父なり。
其腕に子をだきしめて、
暖う胸に寄らせつ、
「わが子よ、などて然ば悲しげに顔かくする。
見給はずや、父上よ、魔の王を、
冠して衣長う曳きし魔の王を。
わが子よ、それぞ狹霧のさまよふなる。」

あはれのものゝ一人にて
世をば孤獨にわれ歩する
われを願ひぬなほもまた
愉快きこゝろあらんとき
やさしき兩親とたのしき子にて
ありたりき

星は親しく照らすかな
入相の鐘ひゞくとき
君が歎びのたかき殿堂
遂に開きて天福示し
われまた華服纏ひして
食卓につかむ日を予知る。
(ウーランド)

汝は幸ある乳のみ兒よ
汝が搖籃こそ汝が身には
なほ限りなき安所なれ
されども成人と汝れなれば
この限りなき天地も
汝が軀に狹隘くならんかも。

(シルレル)

○搖籃の嬰兒

『愛らしの子よ、來たれ、われと往けかし、
諸ともにいとおかしき遊びせん、
濱邊には色さまゝの花さけり、
わが母は黄金縁せる衣もてり。』

「父上よ、父上よ、聞き給はずや、
魔の王の我に聞く其聲を。」
「安かれ、心安かれ、わが子よ、
枯葉にろよぐ風の音ぞ。」

「うるはしの子よ、我と行かずや、
姫だちは汝れを愛て迎へむ
我子よ、我子よ、いとよう見るに、
そは枯果てにたる草原よ。」

「父上！父上！見給はずや、ものすごい
かしこの魔の王の姫だちを。」
「我子よ、我子よ、いとよう見るに、
そは枯果てにたる草原よ。」

即得往生
散る時が浮む時なる蓮かな
短夜や右京左京の鶴の聲
花茨や踏切番の白き旗
花石櫻やまゆ蝶の毒々し
南京の酒肆に詩詠ふ茉莉かな
帷子や觀世太夫が袴能
夏羽織團十郎は歌舞妓者
椎茂る廻の窓のなめくじり

明主が麿に倣ふ

古袴人にもやらで土用干
しなびたれど故郷より來し茄子かな

新刊紹介

文學博士村上專精著

佛教統一論

東京金港堂

○天人論

京橋朝報社

本郷文明堂

びまたが第二編として原理論を出せり、第一編に比して比較的氣焰のあがらざる心地のせらるは獨り吾輩のみにあらざるべし、博士は凡例に於て曰ひらく、『本論第一編を讀んで眞宗を破壊する手の如く妄想を懷きし者あるが故に今や眞宗の聖典に依て余の見解は決して眞宗の教理と衝突するものにあらざる所以を證明せんとするにあり』と、暗に奇禪を買ひし所以を辯護するに似たらむか如し、さりながら博士自ら吾人は眞理の子なり、眞理の親を求めるべからずと絶叫するが如きは、博士自信の強き且つ研究思想の旺盛なる誰か罵撻せざらむや。本書の要旨は宇宙の本體を求めて來りて之を呼ぶに涅槃の稱號を以てしだること

「父上よ、父上よ、あはれ！捕ふるよ、
魔の王の我を惱ますよ」

父は震ひ戰きて急ぎ走らす。
うめく子を腕にかき抱きつゝ、
其腕の子は早うこときれたり

辛うじて家に到れば
（ゲ）
（テ）

○和歌

池殿の障子にうつる影二つ
なみと蓮葉とのさゝやくはなに
月あぼろニンフ波間に浮び出て、
わが亡ききみの愛歌曲づる
君が心蝙蝠と化り吾が心の
燃ゆる血皆を吸ひさりぬ夢
道を説く聖よ、この子耳聴し
されど盲目の行路はいづこよ

○夏季雜咏

句

佛

は當時印度に於ける宗教界全般の風潮なりき、而して此事たるや佛教の根本原理にして重要な問題なりき隨ひて釋尊滅後涅槃論に対する思想の開展の結果を考ふるに淨土教を以て最後終局のものとなざるべからずて、歴史的發達の事實に基きて俱舍宗より成實、法相、三論、攝論地論にして天台華嚴之に次ぎ而して密教及日蓮之に次ぎ最後に来るべきものは淨土教なりとて淨土教に結歸せり、禪宗は教外の故に此中に加ふべからず若し此中に加へんさせば彼は向上門の極致に達したるものなりとて淨土教と同一のものと見て差支なきを論せり、要するに博士は小乘より大乗に漸次思想の開展せられたるこゑを反覆詳論せられたり、其間各宗の教義を述べ終りて一々批判を加へたる處最も博士の得意の點たるべしと思はれぬ。博士一流の無理なる個所なきにしもあらざれども一々指摘するは吾人の欲せざる所、たゞ吾人は本書の梗概を叙して佛教研究上缺くべからざる好圖の著述なるを世にすゝめたるのみ（定價貳圓）

黒岩周六著

著者曰く此書は余の信仰を記す、余は著者にあらず、説明する能はず、主張するなりと、然り此書は著者の信仰其まゝを告白し且つ主張したものにして、其大膽なる主張にいたりては世の所謂哲學者をして殆ど顔色なからしめんとす、勿論獨斷の弊あるは深く告むるに足らざるべし、著者は最近進化思想より凡て一元論を以て根據とし、物質、宇宙、人生、道德、靈魂及び宗教に説き及びし簡にして明（詳細は本號に掲げたる批評を見るべし、亦是近來の好著たるを失はず、左に其一節を抄すべし（定價三十五錢））
人よりして物質を見れば人は活物にして物質は死物なり、然れども物質よりして人を見れば、物質却て活物にして人も亦物質なるに非るか、是れ奇問なり、然れども眞理なり、人を物質と區別し、活と死を區別するは單に自観と他観の別なり、自観すれば萬物皆活けるなり、他観すれば萬物皆死せるなり、今日の進歩したる學術は總て斯の如く認む、之を一元論と云ふ々として流れ出づるを覺えしむ（三十錢）

に臨みたる安藤氏歸京したるにより、席上に於て直に先生臨終の容態を述られ候爲め、一同感涙に咽び候、萩野學士も列席の事とて最後に先生追悼の辭を述べ散會仕候。現今の求道學舍はもとの浩々洞を引け受たるものにて、而も講演の場は打たれ候。

○求道學舍にては満一ヶ年の紀念として去月廿五日庭前に於て一同撮影仕候。舍の一人梅原君高等學校入學試験の爲め金澤に赴かれ候、代りて久保猪之吉君の令弟護兒君入舍仕候。

○大日本佛教青年會 今年の夏期講習會は七月十日過より二週間越後五智に於て開會の筈に候。また關西佛教青年會にて能登和倉に於て開かるゝよしにて、北陸の教界は一層の光彩を添ふる事と存候。

○本會の近角學士は、來月初め方より山形市佛教有志の聘に應し講習會に臨み、講了後、該地の要所數個所にて修養講話となし。次て越後、信州巡回せられ更に和倉の講習會にも臨み、續て小松の講習會に出師せらるゝ都合に候。

○堺に哲學館事件に關しミニアヘッド氏は、書を神戸クロニクル社に寄せて意見を公にせられたるが、學者の態度として洵に忠實なることは一般の賛する所に候。然るにわが政教時報前號の誌上に松木博士の論文中一言、南條博士の事に關する記事ありしが、南條博士は雜誌到着の該日を以て直に之に對する意見を草して寄稿せられたり、本號に記載致候ものは是に候。南條博士の眞面目にして而も斯道に忠實なる泰西の

四年不幸にして回祿の災にかかり、今日まで再建の機を得ざりしとの事に候。

○本會の爲め隱に陽に盡力せられ候文學士本多辰次郎氏はこのたび山形縣中學校に赴任せられ候、去る廿日富士見軒に於て氏の知友相會して氏の行を壯にせん爲め送別會を催し候、出席者三十餘名にて頗る盛會に候ひき。吾人は切に氏の健康を祝するものに候。

○三十六年の前半もうかくと夢の裡に過し申候。あはれくに候、以上。六月八日正午牛砲の音をきつゝ

トラスブルヒより

明治三十六年四月八日

東京にての聖誕祭は定めて美はしからむ。薬蔵河上と墨龍江畔と、大悲の光中、

共に歡喜の光明に充ちたるを喜ぶ皆を吾と、嗚乎互に相慶すべからずや。戸外には惡風、雨を吹きて窓に亂鬪す。机上二三葉の花を捧げ、静に華嚴の梵本を讀む。

佛於無量劫。勤苦爲三衆生。

云何諸衆生。能報三大師恩。

洋々海の如く、廣大虛空を含める大智法身の薩然たるを思ひては、戸外の惡風

暴雨、天樂の如く、天鼓の如し。嗚乎法身は何れの處にも存するも。ついで求道學舍にて御話有之候頃と同時に、弟はこゝにありて先づ十名程の小供に對し、報恩についての感想を語り。次に四十名近くの道友に對して宗教の本領と申すやうなことについて語り申候。その後大内氏を迎へて樹德會にて共に語り候。聽く者百名に近きの盛會にて有之候。大内氏も中々難有御話な致して帰られ

學者に多く讓らざるものに候。學者と云へは尊大に構ふるの弊風ある吾國に於て、南條博士の如き多く得がたき人と云ふべく候。吾等茲に之を披露する所以は學界の爲めに云ふものにして、他の意更に無之候。

○政府と政友會は僅に妥協成り、三日間の停會にて臨時議會は無事に通過致候。而して有力なる議員の續々脱會するは政友會分裂の兆候なりと申すもの有之候。

○府下大谷派の寺院は關八州會を組織して毎年講習會を開きつゝありしが今年も本月十五日より二週間淺草別院にて開會のよしに候。講師は齊藤、近角、常盤、吉田の諸氏に候。

○西藏探險者を以て有名なる彼の河口慧海氏歸朝致候。新紙競ふて入藏談を記載致し居候。

○西本願寺の前田慧雲師氏(帝國大學講師)は、論文を提出し近日中博士號を授與せらるゝとの事に候。

○西本願寺法主の納戸即ち大谷伯爵家の財政豊富なるも、宗教上に關する部分即ち西本願寺の執行所には、二十餘萬圓の負債ありて、此金額は同寺に取りては僅々たる者なるも棄て置く時は遂に大負債と爲りて、救ふべからざる有様に立ち至らんも知る可らずとて、顧問及び各地方の管事給料を廢して經費を節減し、以て早急に此負債を償却せん方針の由に候。

○臨濟宗本山東福寺にては今回本堂建設のよしにて、二十七萬圓餘勸財募集の許可を其筋へ出願せしとの事に候。同寺の四條天皇の嘉祐二年攝政藤原道家公勅を奉して、國家安寧の爲め創立し、開山は聖一國師にして、歷帝の御尊崇甚だ篤く、官寺の名稱を得たる程にて天下の名刹たりしも、明治十

候新保君の來らさりしことは物足らず感せられ候、他のものも皆左様に感し候。名稱種々御示教を煩はし候得共、色々考へたるあげく千葉教院といふ名を命じ候。他より様々の批評をむけ來り候得共不構進み居候。

一度大兄を迎へ得るの好機を得させていたゞき度念十居候。窓外の雨聲もなくさみしげに候。老婆浴を得むため去つて院に在らず、寂寥の禪趣流るゝが如く院内に動き候。來月からは一人の道友同宿する筈なれ共今は小弟一人に候、靜寂のあまり折々求道學舍を思ひ、浩々洞を思ひ、夢魂夜々飛んでなごいふ程には候はれ共、

大光の照護、我が求道學舍及大兄其他諸兄の御上に在らむことを念じ候。尙土曜會に出来るの機承くたえて弟の晩夜々鳴つて聲あり、といふ程の元氣有之候。敬具

五月十八日雨をきつゝ

鼎

拜

○飄然ルーテル肖像の繪葉書獨逸より

來る題して曰く
"Beten ist allein des Glaubens Werk,
Das niemand denn ein Christ tun kann."

Luther.

貴兄か御惠贈の政教時報中ルツターの遺跡を訪ふ文あり、一讀曾遊を懷ふ。今昔の情に堪むるるものあり。即ちこのはがいを差出して遠き兄に寄す。四一二六、〇三、櫻堂生

貴兄起居如何、日々御精勤大賀。小生猶頑在、幸に安下玉へ。毎度政教時報がありがさう。侍らに待つて一讀する事が樂しい。待山兄も無事か、聲を削つたまひふ事を紙上で見た。何、又大に感する處でもあつたのだらう。景山兄さは半期ほど見ぬが筆紙では常に往復している。學校も(チステルン後)先週から大概始つたバルゼンの講義が樂しみである。景山兄に叱られても佛語を始めた再びあふむやつてはいる。忙しからうが時々書き玉へ僕もつさる、待山兄にはモー脈上り下り。諸君によろしくこれも日曜のらく書き。

かわやにも落書すなり永き日や

標

堂

杜鵑啼血

清澤師の葬儀 師が日乘の最後六月三日の下に書して曰く、「血を吐いた病の床に杜鵑」と又師が同日其門弟に寄せたる書に、自ら號を改めて濱風と稱する旨を報じ、終文に曰く、是にてヒュードローと致し可申候と戲言讖を爲し、五日病俄かに革まる、東西兩京の親友門弟馳せ集る者皆終焉に會する能はず、常に隨へる原肱千氏遺言を請ふ、師曰く無と、遂に眠るが如く逝去せらる、享年四十一、法號を信力院釋現亮と謚す、九日正午出棺大濱西方寺に於て葬儀を行ふ、大谷派本山新法主墓下哀悼慟哭して、親しく使を遣はして之に會せしめ、燒香を行はしむ、會葬者五百人、皆憂色忡々として父母を喪するが如し、門徒列に加る者三百人、親友門弟の東西兩京及び地方より來會する者頗る多し、曰く、南條文雄、齋藤唯信、眞宗大學々生惣代二名、和田圓什、荒木源理、石川馨、太田祐慶、村上流情、多田公巖、澤柳政太郎、木津無庵、伏見賢明、澤住田知見、近角常觀、吉田寶龍、石川了觀、出雲路善祐、澤教觀、一柳智成、木曾琢磨、稻葉昌丸、月見覺了、關根仁應、多田鼎、佐々木月樵、曉鳥敏、旭野慧憲、南浮智成、無成賢順、水谷魁曜等なり、儀式頗る嚴肅、香烟空に満ちて、涕淚滂沱たり、午後五時式終り、柩を郊外に奉じて荼毘し畢んぬ、嗚呼師か閱歷行狀の如きは零筆を改めて記することあるべし。

藤井宣正師の計 日は同じく是れ六月六日、天涯不如歸の聲と共に電報は藤井文學士が巴里客舍に於ける逝去を傳へ来る、斷腸何予斷えむ、師は眞宗本派本願寺に屬す、大學卒業後、水谷魁曜等なり、儀式頗る嚴肅、香烟空に満ちて、涕涙滂沱たり、午後五時式終り、柩を郊外に奉じて荼毘し畢んぬ、嗚呼師か閱歷行狀の如きは零筆を改めて記することあるべし。

時冠宇三藏目録の著あり、後出て、埼玉縣尋常中學校長たり、
後また本願寺の命を受けて英國に遊び、當時西遊の新法臺に
隨ひ、身を瘁して事ふ、再び隨ひて印度に遊び、佛教の遺跡
を探檢し、病軀を勉めて、山川を跋涉し、氣候と戰ひて新材
料を探る、再び命を受けて直ちに歐洲に航し、あらなく巴里
に逝去せらる、師出發の際生別即ち死別の覺期を以て家人に
告ぐ、果して此事あり、嗚呼哀哉、予西遊の際英國ブライト
ノに於て師に會し、公園に遊び、青草の上に對坐して胸臆を
披瀝す、言語屢々猶耳にあり、再び伯林に會して深く將來を
誓ふ、師は精神頗る公明、熱情面に溢る、教界必ず無かるべ
からざるの人、再び相見るに及ばずして空しく訃音を傳ふ、嗚
呼哀哉、殊に印度探險の結果を公にするに及ばずして逝く、
洵に惜むべし、予の西遊に臨み、人の送るに義淨の詩を以て
するものありき、今や予丸全を得て、圖らざりき師が今日を
哀悼するの詞とならむとは、嗚呼、（旭村）

10

五月十五日發行

釋　雲　照氏	元良勇次郎氏	大内青　鑑氏
清澤　満之氏	海老名彈正氏	南條　文雄氏
坪内　雄藏氏	前田　慧雲氏	渡邊　南隱氏
澤柳政太郎氏	島田　三郎氏	川合　清丸氏
加藤　弘之氏	大道　長安氏	井上哲次郎氏
片山　國嘉氏		

將來の宗教

相木正久曰
我徒は自由を尊重す乃強ひて同一典型の下に人を律するに忍
べず故て各種の信仰を開展し普く大方の選擇に任す

東京駒込小石川原町三
東京駒込小石川原町三
新佛教徒同志會出版部
四丁目五番
文明堂

發行所

發行所

東京市神田町

日本ニ

ニテリア

弘道會

發行所

石川原駒込

三小
新佛教徒

從同志

會出

版部

發行所

東京市神田区

日本ニ

ニテリア

弘道會

第十二回釋尊降誕會會計報告

總收入金貳百六拾五圓也

內譯

一金參拾五圓也

眞宗大學丙申會委員諸君取報寄附金

一金貳拾圓六拾錢也

報

內譯

一金貳圓宛 樺田雷斧君高城義海君關大溪君穗波快念君那須有高君

一金壹圓宛 永見快賢君

一金壹圓宛 綱代智明君丸井圭次郎君勝又俊龍君大久保宥山君

一金貳拾錢也 加藤精神君

一金五拾錢宛 木村一城君保森覺圓君新井弘道君中村林盛君野口宥均

君青木隆芳君

一金四拾錢也 湯澤龍岳君

一金貳拾參圓貳拾錢也 高輪佛教大學教職員生徒諸君寄附朝倉林兩君

一金貳拾圓五十錢也 曹洞宗第一中學林教職員生徒諸君寄附

一金拾五圓五十錢也 高等師範學校佛教青年會員諸君寄附

一金貳拾圓也 曹洞宗大學林高等學林教職員生徒諸君寄附

一金貳拾圓也 曹洞宗第六君西脇玉峯君安藤弘君

一金貳拾七圓拾錢也 雲君取報

一金拾七圓也 早稻田大學教會寄附杉洗水君朝倉慶友君取報

一金貳拾圓也 哲學館內佛教青年會員關支透君取報

一金貳拾圓也 田中治六君西脇玉峯君安藤弘君

一金九圓五十錢也 安藤正純君上八田三喜君田中捨身君加藤玄智君鈴木泰君

一金壹圓宛 江野哲君上龍英君虎石惠實君澤野龍天君和田鼎君島

一金貳圓五十錢也 貝君光融館君栗木智堂君

一金五拾錢宛 吉田辭致君

一金五拾錢宛 帝國大學內水谷猶象君松平治郎吉君手塚老貴君

一金四拾錢也 高島圓君誠道玄君

一金四拾錢也 塚本賢曉君島池上人御内

一金七圓貳拾錢也 前日送入場券交兩代

一金四十圓七十錢也 當日入場券交附代

一金貳拾參圓九拾錢也 東京帝國太學內佛教青年會員及有志諸君寄附泉道

內譯

一金壹圓宛 近角常觀君眞岡湛海君

一金五拾錢宛 加藤正義君松平治郎吉君辻野彌淳君朝倉曉瑞君渡邊良

一金貳拾參圓九拾錢也 法君古川義天君森川智德君井上信翁君石原即聞君芝田

一金貳拾參圓九拾錢也 隨心君江村弘君泉道雄君乘杉嘉乘君石原龍學君藤井專

一金貳拾參圓九拾錢也 原質成君龜山正質君木部崎了道君神雲確悟君

一金貳拾參圓九拾錢也 雄君取報

總支出金二百三十三圓八十八錢

以上

一金拾圓四拾錢也 入場券交附代

一金九拾八錢 入場券印刷費

一金貳圓八十錢 招待狀及郵稅

一金三圓七十錢 通信費

一金壹圓七十七錢 毛瑟師謝議

一金五圓 音樂院謝議

一金七拾八圓三拾錢 錦輝館拂悉皆

一金八圓 講師車代

一金六拾圓九拾五錢 借物謝讓

一金七拾八圓三拾錢 諸君二千部印刷代施本

一金貳圓七十錢 借物謝讓

一金四圓四十四錢 紙類及雜費

以上

當日會場に於て募集せし東北饑饉救濟義捐金貳拾九圓を翌日青森縣知事へ向

け送付左之詰取書を同縣知事より送り來り候

一金貳拾九圓也 是ハ本縣凶荒ニ付救濟義捐金

右正ニ領收候也

明治三十六年四月十一日 青森縣知事 山之内一次印

大日本佛教青年會殿

明治三十五年五月

大日本佛教青年會

發行所

東京小石川區

東洋哲學會

曉烏敏先生著



第十編第五號要目
(五月五日發行)

- 歐洲再航第四報第五報 文學博士 井上 圓了
- 翼敎叢編抄錄 文學博士 田中 治六
- 一讀一詠 文學博士 小林良四郎
- 圓了漫錄 文學博士 井上 圓了
- 動機說 文學博士 松本文三郎
- 印度研究小史 文學博士 元良勇次郎
- コント教より見たる 文學博士 加藤 弘之
- 釋迦牟尼 文學博士 三並 良
- 道徳と自治 文學博士 虎石 惠實
- 現今の耶蘇傳研究 文學博士 敬治
- 歷史的研究と佛教の將來 文學博士 南條 文雄
- 王學辨論 文學博士 東
- 大阿彌陀經辨 文學博士
- ミュアヘッド教授の辨妄書(原譯兩文) 文學博士 井上 圓了
- 再航日記第六報 文學博士

(行發日五月六)
第十編第十一號
要目
定價郵稅共一部十二錢○半年分六十五錢○一年分一圓廿錢

發行所

東京本鄉

文 明 堂

前號要目

▲如是旨▼ 依田氏
▲春の歌▼ 疑獨庵
▲萬法無礙▼ 仁科氏
▲人生の苦味▼ 曉鳥氏
▲國民教育普及運動▼ 池山氏
▲宗教的自覺と社會の改善▼ 和田學士
▲龍樹菩薩與烏陀憲那王書▼ 松本博士
▲不眞少年の感化事業▼ 小河氏
▲南村閑話▼ 百目木氏
▲椿花帖▼ 多田氏
▲吾妹に▼ 波岡氏
▲懊憹吟▼ 真佐彦氏

(刷印版製堂光三日丁二町伏木善源田勅文書)

可認物便郵種三第省信週日六廿月二十年一十三治明號貳百第報時教政
(行發日八月一月每) 行發日八月六年六十三治明